

令和三年度海音寺潮五郎記念文芸ゼミナール受講生作品集

令和三年度

海音寺潮五郎記念文芸ゼミナール受講生作品集

潮音

～若人の樹～

鹿児島県立図書館

目次

巻頭言

講師紹介

作品

No.26

メタリックストルゲ

恋をする

藍

漂流

パラダイバー

あまりもの

HUMAN RIGHTS CARD

夢屋

県立錦江湾高等学校

県立武岡台高等学校

県立鹿児島工業高等学校

県立指宿高等学校

県立川内高等学校

県立串良商業高等学校

県立大島高等学校

鹿児島第一高等学校

鹿児島修学館高等学校

二年

二年

三年

二年

一年

三年

二年

一年

一年

榎田彩夏

青崎真伊子

田畑有紀子

仲 絢万音

福島嘉津穂

日高 翼

朝沼こころ

五嶋 響

マッサン

・
・
・
・
・
・
・
・
・

・
・
・
・
・
・
・
・
・

・
・
・
・
・
・
・
・
・

・
・
・
・
・
・
・
・
・

・
・
・
・
・
・
・
・
・

・
・
・
・
・
・
・
・
・

・
・
・
・
・
・
・
・
・

・
・
・
・
・
・
・
・
・

・
・
・
・
・
・
・
・
・

2

14

25

33

39

49

56

64

70

講師からの一言

講座の様子

編集後記

・
・
・
・
・
・
・
・
・

・
・
・
・
・
・
・
・
・

80

81

巻 頭 言

数多くの優れた作品を残した海音寺潮五郎は、史伝作家の第一人者であり、鹿児島県が生んだ偉大な作家として知られています。また、第三回直木賞を受賞している作家としてはもとより、NHK大河ドラマだけでなく、映画化もされた「天と地と」の原作者としても有名です。

この海音寺潮五郎の文業をたたえ、功績を後代に伝えるときにも、本県文化振興のための学習機会を提供しようと、鹿児島県高等学校文化連盟の後援をいただき、本年度も当館では「海音寺潮五郎記念文芸ゼミナール」を開催いたしました。

文芸ゼミナールでは、全八回にわたる講義・演習を通して、県内で活動されている作家の方から執筆活動の進め方を御教授いただき、受講生が作品の完成を目指してまいりました。また、第六回においては、特別講師として直木賞作家の佐々木譲先生をお迎えし、執筆の際の苦労や喜び等を直接お聞きすることで、受講者の更なる意欲につながる講座となりました。

現在、「論理的に考える力や深く共感したり豊かに想像したりする力を伸ばし、他者との関わりの中で伝え合う力を高め、自分の思いや考えを広げたり深めたりすること」(『高等学校学習指導要領 国語編』が求められています。

当ゼミナールは、これらの能力や態度の育成に資するとともに、受講生が本格的に執筆活動について学ぶ、かけがえのない機会となったことを考えています。

受講生は、日々学業や部活動を行いながら真剣に執筆活動に取り組む、小説への思いを新たにしたことでしょう。ここに掲載している十作品からも、受講生が文章を練り上げる力を着実に身に付けている様子が伺え、大変うれしく思います。

最後になりましたが、当ゼミナールの実施に当たり、本年度も受講生を温かく作品完成へと導いてくださいました立石富男先生、出水沢藍子先生に心から感謝申し上げます。先生方に御指導いただきましたことは、受講生にとって貴重な財産として今後の生活の中に生かされることでしょう。さらに、受講生の執筆活動に対する一層の意欲や、執筆活動の道を志す可能性も高めていただけたのではないかと思っております。

今後、この作品集『潮音 ―若人の樹―』にふれた県内の高校生が、一人でも多く小説を創作することの楽しさを感じ取り、興味を持つてくれることを願っています。

令和四年三月

鹿児島県立図書館長 古川 伸二

講師紹介

立石 富男 先生



枕崎市生まれ 鹿屋市在住
作家 文芸同人誌「火山地帯」主宰
九州芸術祭文学賞鹿児島地区選考委員

【文学賞】「記憶の翳」九州芸術祭文学賞鹿児島地区優秀賞

「うしろ姿」第十二回南日本文学賞「知覧へ行く」労働者文学賞

「ソロモンの夏」第十五回自由都市文学賞

【著書】小説集『黄昏』掌編集『鳩を抱く』『島比呂志』『夢と思いと言葉』掌編集『モンブラン』小説集『石を持つ朝』ほか

出水 沢 藍子 先生



奄美大島生まれ 鹿児島市在住
作家 鹿児島市・薩摩川内市でエッセイ・小説教室主宰
小説春秋同人 二〇一三年から南日本新聞「文芸季評」担当
二〇一六年から南日本新春文芸審査委員

【文学賞】「グンセイフの夜」南日本文学賞「マブリの島」新日本文学賞

「御月待ち」「銀花（ぎふあ）」文学界同人誌奨励賞「環流」文学界同人誌優秀賞ほか

【著書】短編小説集『マブリの島』『銀花（ぎふあ）』大島紬小説集『爪』共著『鹿児島的女性作家たち』歩き続けた画家、保忠蔵の足跡『何もいらない』ほか

【講演】「奄美と私と小説」「鹿児島ゆかりの女性作家たち」「内なる奄美を書く」「私を書く気にさせる作家たち」ほか

No. 26

県立錦江湾高等学校 二年

榎田 彩夏

たとえば。愛だとか恋だとかいう感情があったのだとして。もし、その感情が私にもあったのだとしたら。

「私は確実に壊れる」

恋は盲目、そんな言葉を目にしたことがある。自分と彼の世界に酔って、彼の本心をわからずにいて、気づけば彼は他の人を好きになっていた。そんな顛末だった。

遠目で誰かが誰かに告白しているのを見たことがある。それも何回も。帰り道、付き合っている人たちとすれ違うことがある。ほぼ毎日のように。

空気が読めていないだとか、時代に遅れているだとか。色々なことを視線で言われてきた。私からしたら恋愛なんて言うものは、「馬鹿馬鹿しい子供のお遊び」だった。

都内一の進学校に一人、田舎町から進学し、寮生活と都会での生活にもようやく慣れてきた俺は、去年も同じクラスだった南田と一緒に、売店にお菓子替わりのパンを買いに来た。「おばちゃん！ バーガーパンまだ残ってる？」

「さっきの休み時間に売り切れたよー」

「あー。さっきは移動教室だったからなあ……。じゃあ焼きそばパン！」

「それもさっき売り切れたよ」

「え？俺の運、今日死んでね？」

うなだれている南田を引きずって教室へ戻れば、次の現代社会の先生がもう来ていた。

チャイムが鳴る。

眠気との闘いがまた始まった。

今日の現代社会の授業テーマは「クローン」だった。俺が小学四年生の頃に起きた悲惨な事件。未だに覚えていることは、クローン開発に関する研究でノーベル生理学賞を受賞した黒崎清博士が殺されたということ。現場は彼の研究室で、犯人は彼が造り出したクローンの第一号、「No.1」。殺されたのは彼だけではなく、彼と共に研究室内にいた彼が造り出した数多くのクローンの少女たち。

その後、研究室におらず殺されなかったクローンの少女たちはみんな、「No.1」と同じように人を殺す可能性があるとして、全員殺処分されたということ。

授業では、この事件以降研究が禁止されたクローン開発研究に賛成か反対かについて、みんなで考えることになった。

同じグループには、二歳年上の彼女を持つ海斗と、学校一の冷酷美少女なんて一部男子が騒いでいる黒崎レイがいた。

黒崎さんは授業中ほとんど黒板を見ずに、教科書や資料集に載っている、黒崎博士とクローンの少女たちの写真を懐かしむように見ていた。

「黒崎さんって、この博士と苗字が一緒だけど、もしかして知り合いとか、親戚とかだったりするの？」

「……いや。まあ、うん。肯定はする」

黒崎さんはそれだけ言うと、また教科書の写真を静かに眺めていた。

「では、各班でクローン研究に賛成か反対かの意見をまとめてください」

先生がそう言うと、教室が少しだけうるさくなった。俺は二人にどう話をまとめるのか振ってみた。その結果、俺の班の意見としては「クローン研究に賛成」するということになった。

「賛成の班が二つで、反対が六つ……。では、それぞれがどうしてその意見になったのか、理由を述べてください」

俺たちの班と南田のいる班を除いた六つの班は全員一致で反対意見にまとまっていた。黒崎さんの表情が曇る。彼女は班での話し合いの時に、「クローン研究を反対してしまったら、彼女たちが存在したことも否定することになる」と言っていた。

その意見を聞いて、俺も海斗も賛成にするか反対にするか悩んでいたが、賛成することにした。彼女の訴えるような、殺処分された罪のないクローンの少女たちを慰めるような瞳

が、強く印象に残った。

私はこの時間が嫌いだ。とても嫌いだ。

現代社会と名付けられたこの教科。脳内情報による現代社会という教科の基礎情報からの予想で、大分昔から覚悟は決めていたが、怒りを覚えてしまうのは仕方が無いだろう。

やっぱり、私は人間が嫌いだ。結局はヤツらと一緒になんだろう。クローンを一人の人間として絶対に認めようと思わない。個性がないから。それがクローンというものではないだろうか。あの頃が懐かしい。……あの子のない世界に私の居場所なんて無いんだから。

No.26が私の本当の名前だった。そして、私には黒崎清が造ったクローンの証拠であるバーコードが今も、この腕に残っている。

「No.27」と呼ばれた彼女は、私の双子の妹のような存在だった。

黒崎博士が造り出したクローン、「No.26」には泣くことや悲しみ、人を愛するということに関する感情が欠落していた。そして、No.26を造り出した翌日に博士は、No.26に欠落していた感情を補填した個体、No.27を造り出した。

しかし、研究とはそうも簡単にはいかない。No.27は多くの感情を得ることができたが、代わりに聴覚を失ってしまった。

私にとって No.27 は唯一の理解者でもあった。そんな彼女はあの事件の日に、私を逃がそうとかばって No.1 に殺されてしまった。目の前に飛び散った赤色を今も鮮明に覚えている。微かな声で、彼女が造り出されて初めて発した声は、あまりにも小さすぎて、私には聞き取れないまま闇の中へと溶けて行ってしまった。

必死に研究室から逃げ出したあと、私は必死に自分の存在を隠し続けた。交差点の大きなモニターで流れるニュースでは、連日博士の殺害事件についてのニュースばかりが流れている。そんな中に、耳を疑うようなニュースがあった。

「政府は黒崎博士を殺害した No.1 クローンと同様に、生き残った他の個体も人を殺してしまう可能性があるとして、現在生き残りのクローンの搜索と殺処分を進めています。現在七個体が殺処分され……」

思わず、交差点の中心で立ち止まってしまった。研究室を抜け出す時にこっそりと盗んできた、カード類でいっぱい博士の財布、身分証明書代わりになりそうな住民票。怒りのあまり、くしゃくしゃにしまった、私に関する書類やメモ書き。

脳内データをもとに、孤児院と呼ばれる所へ着いたのは、この日から三日後のことだった。

十二月八日、黒崎レイ、推定十歳。

孤児院の寮母さんは、私の青味がかった瞳から、ハーフだと予想して、カタカナの新しい名前をくれた。孤児院に来た

日を誕生日に、黒崎レイとしての人生は新たにスタートしたのだった。

まだ、研究室にいた時の方が楽しかったかもしれない。そう思えるくらいに、小学校、中学校という場所は面白みのない場所だった。

クローンの脳内には、造り出された時から世界中の言語や常識だけでなく、専門的な論文までもがインプットされている。もうすでに脳内にある情報を四十五分という無駄に長い時間を使ってまで、何回も引用する単純な作業のどこが楽しいのだろう。理解ができない六年間だった。

高校への入学が決まったとき、私は孤児院を出て、一人で生活をする道を選んだ。寮生活という選択肢もあったが、ありがたいことに、研究室から持ち出した私の身分証によれば、私の年齢は二十歳らしい。おかげで一人暮らしをするという選択肢を選ぶことができた。

持ち出した黒崎博士のカード類の中には、大学内のパスカードや店のポイントカードだけでなく、銀行のカード類もあった。あまり防犯意識が無かったのか、彼のその財布の中には、色々な暗証番号のメモがあり、そのおかげでお金の心配をすることも無く、高校から少し離れた場所にあるアパートの一室を借りることができた。

No.27 のいない世界というのは、大変退屈で色のない世界だ

った。

一人で生きて行くことを選んだのはいいが、無いはずの感情が芽生えてきたのか、「No.2」を失った悲しみがあまりにも大きかったのか、私の中に少しずつ、人間らしい感情が芽生え始めた。それに伴って、私が人間では無い……クローンであるという証明にもなる腕のバーコードが少しずつ、色を失ってきていた。

このバーコードは私だけが皆と違う証拠であるが、この印が消えてしまうことこそが、「No.2」の本当の別れだと思い、ずっとこの印が消えていく条件について考えてきた。

黒崎博士がどういった目的で私の脳内に印に関するデータを残さなかったのか。自分の脳内にあるデータだけでなく、図書館に所蔵されている世界中の新聞や雑誌、彼の論文にさえも、何一つ情報が無かった。

東京都内といえども周りは木々に囲まれている。大学別館として建てられた古臭いコンクリート造りの冷たい巨塔。

冷たさに惹かれたのか、はたまたもうすでに廃墟であるからなのか。その巨塔の中を浮遊しているように見える、人影があった。

その浮遊しているように見える影が、ゆっくりと地に足を付けた。長い髪が顔を隠している。

純は手に持った懐中電灯の光を下へ向けた。

「幽霊……？　じゃないよな……」

そうと決まればあつという間だった。

俺は黒崎さんの腕にうつすらとバーコードの印があるのを見たことがある。

あれは、帰宅時に急な土砂降りになり、生徒のほとんどが雨で濡れてしまった次の日のことだった。

黒崎さんは一年中長袖の制服を着ている。どうしてずっと長袖なのか。気温が四十度を超えてしまいそうな暑い日だって、汗一つかかない。

不思議に思った俺は、一度だけ黒崎さんに尋ねたことがある。

「クーラーの風が苦手だから」

黒崎さんはこちらを見ずにそう答えた。

土砂降りの日の次の日、黒崎さんは半袖の制服に薄いカーディガンを羽織った姿で登校した。

その時、カーディガン越しではあったが、俺には薄っすらとバーコードの印が見えてしまった。

俺は仮説として、「黒崎レイ「クローン」を立てた。

黒崎さんの腕にあった薄いバーコードと、クローンに関する彼女の考え。……そして、教科書や資料集のクローンの少女たちや博士の写真を懐かしむ姿。

俺は彼女を救いたいと思った。

現状、クローンは規制され、生き残ったクローンたちも発見されると殺処分されている。黒崎さんがクローンであるということ。おそらく黒崎博士が造り出した、クローンの生き残りであるということ。このことをもし、他の人が知ったら……。黒崎さんはきっと殺されてしまう。

俺は授業の時の黒崎さんのあの訴えるような瞳が忘れられない。

体育祭も終わり、涼しい風が吹き始めた。

「あの例の廃墟、幽霊が出るらしいよ。せっかくだしき、俺らで肝試ししない？ ほら、海斗は例の彼女も連れて来てき……。俺は純と行動するから、俺らと海斗&彼女ペア、どっちが早いかな勝負な！」

南田はそう言う、「今日の夜八時に廃墟前集合な！」と付け加えて、走って帰ってしまった。

「あ、ちよつと待っ……。あいつ足早すぎだろ」

海斗は呆れた様子で南田の走って行った方向を眺めていた。

「海斗はどうする？ 俺は南田があんな感じだし、寮母さんにバレないようにこっそり行くけど……」

「あーどうしよ。んー、連絡だけして、行きたそうなら一緒に行くかなあ」

夜の七時半を回る頃。廃墟の前に俺は立っていた。

まだ、誰も集まっていないようで、風で木々の葉が擦れる

音が、ザワザワと廃墟内にまで響いていた。

ピコン。と鳴ったスマホを開けば、海斗から「彼女も連れてくからちよつと遅くなるかも」とメッセージが表示された。

まだ、南田は来ていない。

もしかしたら、南田のことだからもうここについていて、俺を驚かそうと隠れているのかもしれない。

気づけば、集合時間の八時になっていた。

「南田ー？」

八時を回ったというのに、南田の姿は無かった。海斗たちは少し遅れると言っていたから、もう少ししたらここに来ると思う。

九時を回ったら帰ろう。

そう思って、懐中電灯を片手に廃墟の奥へと入って行った。

真っ暗な奥の方は、外の木々のざわめきさえも聞こえない静けさだった。入口の所にあった「××大学生命創造学科別館」の文字と館内マップを思い出しながら、ゆっくりと一番奥の階段を上る。

六階建てコンクリート造りの建物は、廃墟となって八年経った今でも、当時のままの姿で重たい空気を纏っている。

「VI-A-78」と書かれたプレートを確認してから、ゆっくりとその扉を開けようとしたとき、入口側の階段を上ってくる音が聞こえて、俺は急いで自分の上って来た階段を駆け下りた。

息切れしかけながら扉を開けて、外に出る。

木々のざわめきが俺の不安を煽って、俺は耳をふさぎたくなった。ゆっくりと深呼吸をして、廃墟の方を見ると、ゆらゆらと動く、白い影があった。真っ白なロングワンピースと長い黒髪が、一階の奥の部屋……「I教授室」の中に消えて行った。

手に持った懐中電灯を落としそうになりながら、俺はその幽霊のような何かが、部屋の奥に消えて行くのを見つめるとしかできなかった。

「幽霊……？　じゃないよな……」

懐中電灯のストラップを、落とさないように手首にしっかりと巻きつけてから、俺はもう一度だけ廃墟の中に入ることにした。

一階の探索はやめて、二階、三階……と階段を上がり、もう一度「VI-A-78」の前まで来た。

最上階の一番奥のこの部屋が、黒崎博士の造り出したクロインの少女たちの住居となっていた。

「VI-A-78」の入口は六階の一番奥だけにしかないが、部屋全体は六階の半分近くを占めているらしい。館内マップを見た時に、帰る前にこの部屋だけでも行ってみたい。そう思った。俺の仮説がもし合っているとしたら、黒崎さんはここで暮らしていたことになる。

黒崎さんが殺されないようにするために、俺にできること

は何か。

もしかしたら、この部屋に黒崎博士がどうしてクロインを生み出したのか……あのバーコードの印の意味は何なのか。俺の中にあるいくつもの疑問点を解決できるような何かが残っているのかもしれない。

「警察の捜査が入ったから、あまり期待はできないな」

俺は部屋の扉を開けた。

クラスメイトの南田くんが仲のいい二人に声を掛けて、放課後あの大学別館で肝試しをすると聞いて、少しだけ悲しくなった。

三人はあの授業の時にクロインのことを否定しなかった。それなのにまるで、私の妹 NO.27 までをも冒瀆するかのような行動をしようとしている。正直、許せなかった。

とりあえず、彼と NO.27 の生きていた、存在していた証を無くされないように見張るようにしよう。

そう思った私は、今夜七年ぶりにあの場所へ行く覚悟を決めた。

黒崎博士の遺した書類は、そのほとんどが警察の手によって押収されていた。私たちクロインと彼しか知らないような秘密の隠し部屋まで、彼の物はほとんど押収されていた。

「やっぱり、そう簡単には見つからないよな……」

結局、誰も来ている様子がなかったので、私は久しぶりの

「家」を探索することにした。

もしかしたら、彼がこの印についてなにかメッセージを遺しているかもしれない。

無心で彼のデスクのあった「I教授室」の探索をしたが、関係のありそうな紙切れ一枚すら、見つけることができなかった。

最後に、懐かしいあの部屋にでも行こう。そう思って、私は近道の入口から一番離れた階段をゆっくりと上がって行った。

きっと警察の捜査が入ったのだろう。部屋の中には大型の機械といくつかのノートなどが残されているだけだった。

あの悲惨な大量虐殺が起きたとは思えない程に、部屋の空気は澄んでいた。ただ、残されたノートの日付があの事件の日で止まっていることや、使い込まれた様子のカーテン。クローンの誰かが使っていただろう香水の瓶、使いかけの歯磨き粉……。所々に残る生活感が、物悲しさを演出していた。

埃を被った洗面台の鏡を袖口で拭き取ると、少し錆びついた鏡面が不安そうな顔をした俺を映し出していた。洗面台に手をつけて、その鏡をゆっくりと外す。なぜだかそうしないといけないと思って外した鏡の下に隠れていた壁には、一枚のメモ書きが貼り付けられていた。

「何をしているの……？」

その声にハッとして振り向くと、真っ暗な室内で少ない月

明りを反射して、ボウッと白く光っているように見える影があった。

「黒崎さん……？」

「早川君は、ここで何をしていたの？」

「え、あ。ほら、今日南田とかと肝試しする約束をして、それで、待ってて……」

「言い訳はいいから。この部屋で、ここで、何の目的で何をしているの？」

黒崎さんは真っ白なロングワンピースの裾を握りしめて、ギッと俺を睨んだ。

「ここで、あの事件があったことは知ってる。俺は黒崎さんが、あの事件にきつと関係してるって勝手に予想を立てて、勝手に色々調べていたんだ。……黒崎さんがもしクローンだったら、殺されてしまうかもしれないから。」

「……どうして、どうして、私がクローンだって思ったの？」

「土砂降りの中みんなが帰った次の日、黒崎さんが初めて半袖で学校に来ていた日。俺、聞いたよね。どうしてカーディガンを羽織ってるの？ って。その時に見えちゃったんだ。カーディガン越しではあったけど、腕にバーコードの印が……」

「どうする？ 殺す？」

黒崎さんはそう言うと、俺の持っていた鏡を床に投げつけた。バラバラになった鏡の欠片の中から、ちょうどナイフのような形に割れた破片を手にとると、俺の手に握らせた。ど

うしたら良いのかがわからなくて、俺はそのナイフを強く握ってしまった。

「痛っ……」

右手の親指の付け根から、鮮血が滴り落ちた。手に力が入らなくなつて、手に持っていた懐中電灯が落ちた音が響いた。

懐中電灯を持ち直そうとしたとき、バタツと倒れる音がした。慌てて懐中電灯をそちらの方向へ向けると、黒崎さんが真っ青な顔をして座り込んでいた。目線がおかしい。焦点がブレているように見えた。

「黒崎さん……？」

「No.27を、妹を殺さないで。何が不満なの？ 殺すなら私でもいいでしょ？ ねえ！ No.1……話を聞いて！ こっちを見て！」

突然、黒崎さんは叫ぶと、俺を突き飛ばした。その拍子に持っていたナイフが血で滑り落ちて、黒崎さんの手に刺さった。

「クローンはどんなに頑張ってもヒトにはなれないって、そんなの、当たり前じゃない！ No.27を犠牲にして、どうして私は生きてるの……？」

「黒崎さん！ 手が」

「あ……。え？」

黒崎さんは手に刺さったナイフを見ると、勢いよく引き抜いた。

「え、ちよつと！ 血が……」

「大丈夫。取り乱してごめん。……で、どうする？ 私を殺す？」

「殺さない」

「なぜ？ クローンだよ、私」

「クローンは、人じゃないって……。でも、生きてるじゃん。クローンだって……」

「クローンはこの、バーコードの印がある限り、ヒトにはなれない。そう、彼は言っていたの」

「うん。でも、俺はクローンだからって殺したりするのは違うと思うんだ。だって、俺ら人間だって仲間内で争って、血を流して、人を殺して……。それなのに、たった一度沢山のクローンの中の一人が仲間を、博士を殺したからって……。クローンが造られたものだからって、生き延びたクローンまでも殺すのは間違ってる俺は思ってる」

俺が見つけたメモ書きには、こう書いてあった。

「クローンの腕に印をつけよう。彼女たちは僕がどんなに頑張っても完全な個人……人にはなれない。でも、彼女たちが自分の力で自分に欠けている部分を埋める事ができたら、彼女たちは個人になって、そして人になる。完全な人になった時、印はきつと消えるはずだ」

黒崎さんは、メモ書きを見て泣いていた。

「それで、今日はどうしたの？」

「純に知らせたいことがあって」

そう言うのと彼女は上から羽織っていたカーディガンを、バサッと俺の方に投げた。

「印、隠さなくていいの？」

「あーあれね、今日知らせたいことはそのことなんだけど」

黒崎さんはそういうと、俺に印のあった腕を見せて来た。

「消えてる？」

あの時に俺が見たはずの印が、跡形もなく消えていた。

「私が完全な個人……ヒトになれなかった理由って知ってる？」

「クローンは何かしら欠落しているから。って書いてあった気がするけど、俺的には俺ら人間だって完璧じゃないし、みんな何かしら欠落しているはずなんだよな」

確かに、クローンは人とは違う。造り出された時にはもう、

脳内にデータとして世界中の情報の全てが入っているというし、そもそも人の細胞を弄って生まれたわけだから、俺らは根本的に異なるのかもしれない。それでも。

「クローンだって、生きてるのに……」

俺にはやっぱり、沢山の人クローンを迫害したり、研究を規制したりするのはおかしいと思う。俺だって、黒崎博士が何の目的で、どういった意図があって、クローンを造り出したのかはわからない。

生命倫理的な問題以前に、彼女たちクローンも、生み出された一つの命ではあるわけだから……。

「俺は、もっと勉強をして黒崎博士の研究資料を元に、もっ

とクローンについて知りたい。そして俺はクローンと人間が共存できるような社会を作りたいと思う」

「あの時の純、プロポーズみたいで面白かったな」

黒崎レイはリフォームされた大学別館のカフェでコーヒーを飲みながら、テレビを眺めていた。

「そんなこともあったけど、人間と同じようにクローンに接する。差別や偏見を捨てる。二度とあの事件と同じような悲劇が起こらないように、ヒト型クローンは作らない。俺らが望んでいたことが、国際社会で認められて本当に嬉しいよ」

××大学生命創造学科准教授となった早川純は、レイの向かい側の席で、レイと同じようにコーヒーを飲みながらテレビを見ていた。

純はあの一連の出来事をきっかけに、今まで以上に勉強に取り組み、黒崎博士の在籍していた大学の生命創造学科へ進学した。黒崎博士の行っていたヒト型クローンに関する研究は規制され、ヒト型クローンの研究室は無かったが、豚や牛などの家畜型クローンの研究室や、犬や猫などのペット型クローンの研究室などがあり、純はサルなどの陸上哺乳類型クローンの研究室に入ることにした。研究で純はこっそりと黒崎博士の研究データを集め、担当の教授を何とか説得し、卒論に人間とクローンの共存についてまとめた。

ただの大学生の卒論ではあったが、その論文を教授が学部長へ提出したところ、最初はその事件のこともあってか認め

でもえなかったが、学部長へ純が何度も説明をしに行ったことや、レイに会ってもらったことなどがきっかけで、学部長は純の論文を国際的な科学雑誌に掲載できないか交渉することにした。

大学院へ進学した純は表向きには陸上哺乳類型クローンの研究をしているが、ちょうどその頃にリフォームされた生命創造学科別館の「VI-A-78」を借りて、ヒト型クローンに関する研究を行っていた。

大学院卒業も見えて来た頃、純の元を学部長と学校長が訪れた。

「早川純君。君の論文が正式に国際発表されることになった。初めの反響は期待できない、君の論文はきつと批判されるだろう。それでも、君が人間とクローンの共存を望むのならば、准教授として黒崎博士のようにまた、ここでヒト型クローンに関する研究をしてくれないか」

レイは高校卒業後、都内の古本屋のおじいさんに気に入られて、おじいさんの面倒と店番を任された。高校時代に住んでいたアパートを引き払い、1LDKのマンションに引っ越すことにした。その時にレイが純に声を掛け、ヒトとクローンの共同生活が始まった。

バタバタとした四年間が過ぎ、純の書いた論文が国際的に発表されると聞いた時は驚いた。更に、「VI-A-78」で准教授

として研究を続けると聞いた時は、もっと驚いた。

純の正式な就任は大学院を卒業してからにはなるが、半年も経たずに、純が准教授として研究を続けてくれるというところが、とても嬉しかった。

腕のバーコードが完全に無くなり、私はヒトになった。そう実感したのは高校の卒業式の日だった。

「卒業したら、俺と付き合ってほしい」

純は私が腕のバーコードが消えたことを告白した日に、私にそう告白した。

私に足りないもの、それは感情だった。特に悲しみや人を愛するといった感情がほぼ無く、私はNo.26を失った事で悲しみや涙を知ることができたが、人を愛するという感情を知らずに、この感情を無意識のうちに恐れていた。

「黒崎レイじゃなくて、No.26のことが俺は好きなんだ。俺はレイと世界を変えたい」

純の告白を隠れて見ていた海斗君や南田君のにやけ顔が見えて、思わず笑ってしまった。

「私は、今すぐにでもいいんだけどな」

海斗君や南田君がニコニコと純を見てからかっているように、私もからかってやりたくなった。

その時、私の中にあった、このバーコードの印が消えてしまふことが、No.27との本当の別れだ、という考えが消え失せ、No.27と私自身No.26が合わさって一人のニンゲンになったように感じた。

純が大学院を卒業すると共に、正式に准教授として研究室を持てた日。私と純はその日の夕方、区役所が閉まるギリギリの時間に、婚姻届を提出した。同じ日に海斗君たちも提出したと彼の結婚式で知った時は、高校時代のみんなで大笑いした。

私がクローンであるということを知っているのは、純と海斗君と奥さんの憂さん、南田君、大学の一部の先生方だけになるようにという純の考えで、式は挙げないことになった。純の両親との顔合わせの時も、私がクローンであるということとは伏せられていて、罪悪感を抱いたが、純の両親は孤児院育ち（という体で純が紹介した）で親の顔もわからない私を温かく受け入れてくれた。

平凡な日々が一年、二年と過ぎた頃。純が私のアップデートをしたいと言った。

「レイにとって大切な話だから、ちゃんと聞いていて欲しい。レイをもっと完璧に、一人の人間にするために、俺はレイをアップデートしたい。初めての事だから、一年くらいかかるかもしれないけど……」

「純の研究の為だったり、純のやりたいことなら、もちろん私は協力するよ」

そして、私は純の作った新しい機械の中に入り、深い眠りについていた。

ここまでは、純の理想を実現化するために作られた「私」のありもしない偽りの記憶。現実だったのは、真実を知らない「私」が目覚めた後の記憶だけ。

大型機械が大きな音をたてて起動した。機械内部は薄緑色の液体で満たされていて、その液体の中で十六、十七歳くらいに見える少女が沢山の管に繋がれて眠っていた。

そんな少女を、機械越しに見つめる青年の口元は弧を描くと、真つ赤な舌で薄い唇をゆっくりと舐めた。

青年は少女から目を離すと、散乱した真つ暗な室内を見てため息をついた。そして、足元に乱雑に積み重ねられた本を蹴り飛ばすと、機械の扉を開いた。

「こんにちは、初めて目にする世界はキミにはどんな風に見えるかな？ 俺の名前は早川純。君は俺の作った『二十六番目』のクローンになる」

「お久しぶりね、純。私は黒崎レイ、本名はNo.26……ってもう名乗らなくてもいいのね」

よくよく考えれば、あの時純が「お久しぶり」と言ったあの時から、私の記憶とこの世界の相違点は身近にあったのだ。

早川教授にはクローンの妻がいる。いつから彼女がいたのかはわからないが、彼女について詮索してはいけないという暗黙のルールが大学内にはあった。

カフェテリアには今日も早川教授とその妻の姿がある。
「No.26」の文字とバーコードが刻まれた右腕が、彼女が人ではない証拠だ。

「俺の思い通り、理想は全部叶ったって訳だ」

早川純は、二年後に全てを知った「No.26」に殺される。

メタリックストルゲー

県立武岡台高等学校 二年

青崎真伊子

季節は春。世の中は新学期やら年度初めやらで忙しい時期だ。それは国軍基地でも変わらない。

「番号一から始めッ」

今日も上官の掛け声に従って点呼をとる。上官は入隊したばかりの新兵に声が小さいと怒鳴った。そんな様子を入隊四年目のカイレンはため息混じりに眺める。

カイレンは純戦闘用ロボットだ。今の時代のロボットというのは、多くが人間と類似した姿をしており、人間とほぼ同じ感情を持っている。ロボットたちは人間社会に欠かせない歯車となり、世界を動かしている。

「今日の上官気合入ってるな」

隣にいた、これまた同じロボット、チアカが言う。彼は入隊十年目のベテランで、カイレンの親友でもある。

「今年は入隊希望者が多かったからな。そりゃ気合も入るだろう」

点呼が終われば次はランニングだ。人間ではない自分たちにとって、これが何の意味があるのかは分からない。たとえ

意味を知ったとして今後の人生（ロボット生？）に何ら影響はない。

「もっと声出せ！ 特に新入り！」

「はいッ」

人間の兵士は息を切らしながら必死で走っているのに対し、機械の体をもつカイレンたちはすました顔でガシャガシャと走る。春とはいえ運動をすると熱くなる。休憩時間になると人間は汗を拭いて水分補給をし、ロボットは排熱をしてエネルギー補給をする。

「ところでカイレン。あの噂、本当だと思うか」

ヘルメットを拭きながらチアカが尋ねた。

「噂だと？」

「有名研究所出身のケアサポートロボがこの基地に配属されるってやつ。かなりかわいいらしいぞ」

「興味ない。メジャーリーグの方がそられるな」

正直言ってカイレンは、ロボットの中でも情緒的なものに少し疎かった。かわいい感じのロボットが来るからといって「へえ、そうなんだ」くらいにしか思わない。電撃的な出会いというものを経験したことがなかった。今後もすることがないだろう。

「全員講堂に十時までに集合しろ。臨時集会がある」

上官の指示で、駆け足で講堂に向かう。その途中で小さなロボットを見た。黒い髪、額には紺碧の石がついている。遠目からでもわかるほどそのロボットは可愛らしかった。頭の

てっぺんからつま先まで電流が駆け抜ける。

前言撤回。電撃的な出会いはこちらにあった。

「こんにちは。今年この基地に配属されることになった、皆さんのヘルスケアを担当するリシアといいます。よろしくお願いします」

ペこりとお辞儀をして舞台を降りるリシアは、緊張しているのだろうか、どこかぎこちない。次いで舞台に登ったのは桃色に染まった髪的女性だ。

「リシアの制作者、ヒメカワだ。このロボットのメンテナンス作業のためしばらくここに滞在する」

まさか、とカイレンは息を飲んだ。ヒメカワ、とても聞いたことのある名前だ。聞いたことがあるどころか、入隊前は毎日その名を呼んでいた。

「ヒメカワ！」

集会が終わると、カイレンは急いで彼女のもとへ向かった。

「あれ、カイレンじゃないか。久しぶりだね。元気してた？」

「元気も何も、なんであんたがここに」

「さっき言ったら、私はリシアの制作者。あの子が慣れるまでここにいるし、君らのメンテナンスもしに来たんだよ」

ヒメカワ、世界最年少でロボット工学博士号を取得した天才だ。カイレンは入隊前、とある事情によりヒメカワのもとで過ごしていた。

「博士、誰と話しているんですか」

ヒメカワの背後からひょこっと出てきたのは件のロボット、

リシアだった。

「私の旧友のロボットさ。もう一度自己紹介でもどうだい」

「はい博士。僕はリシア。よろしくね」

「……ああ、オレはカイレンだ」

リシアの手を握ると、甘い電流が微かに流れた気がした。「じゃあ、そういうことだから。話したかったらいつでも私はベースラボにいるし、リシアは談話室にいるよ」

ヒメカワはリシアを連れて基地内に入っていた。

午後、早速カイレンは談話室を訪ねた。談話室にはあまり入ったことがなかったが、以前行ったときにはこんなに花は飾られていなかった気がする。

「リシア」

「あ、カイレン！ 来てくれたんだね」

ぱたぱたとリシアが走ってきた。彼の機体からはほんのりと花の香りがする。

「この大量の花はなんだ？」

「せっかくの談話室なのに、癒されるものがないなんてもったいないよ。あのね、この花はガーベラっていうんだよ」

リシアは嬉しそうに花を飾り付ける。その時背後からノック音がした。振り返るとチアカがドアのところ立っていた。

「午後の訓練をサボるとはいいい度胸だな、カイレン。かわいいちゃんに現を抜かすのは軍人としてどうかと思うぞ」

「こんにちは。休憩かな？」

「ああ、ちょっと悪ガキをしょつ引こうと思ってね。ところ

で、この部屋の花は君が飾ったのか、綺麗だね」

チアカは部屋を見渡して言った。リシアは頷き、「よければどうぞ」とガーベラを一本差し出した。

「気持ちだけでもらつとくよ。俺はもう戻らなきゃ。ほら悪ガキ、いくぞ」

「じゃあね、カイレン。次来るなら夜とか、オフの日とかにしてね」

カイレンはまだこの花の香りのする空間に居たかったが、チアカに引きずられて訓練場に向かった。

射撃訓練のとき、硝煙の中にいてもあの香りは鼻の奥ですつとくすぶっていた。気を抜くとすぐ談話室へ行きたい衝動に駆られる。おかげで的を何発か外してしまった。

「カイレン、今日は調子が悪いな。たるんどるぞ」

「すみません、上官」

「まあいい。明日は戦闘演習だ。気を引き締めてやるように」
「はっ」

上官に注意され、なんとか頭の隅に香りを追いやろうとしたが出来なかった。

「よう、今日のお前は上の空だな。あれか、お花ちゃんのことか？」

「お花ちゃん？」

「リシアだよ。あの子のこと考えてボーっとするんだろ」

からかうように笑うチアカに若干腹立たしさを覚えながら、ライフルを的の中心めがけて撃った。ぱん、と小気味良い音

とともに中心に穴が開く。頭にかかっていたモヤが晴れていくようだった。

「明日は戦闘訓練だな。メンテ、ちゃんと受けとけよ」

訓練終了のチャイムが鳴った。

夜、メンテナンス室にカイレンは行った。

「待ってたよ。き、横になって」

桃色の髪を雑にくくっているヒメカワは、慣れた手つきでカイレンの装甲を解除し、胸のハッチを開けて丁寧に素早く診ていく。カイレンの体は少し特殊で、彼の構造を一から知る者でなければ簡単に中身を見ることはできない。

「なあヒメカワ、オレはあいつのことが気になってしょうがない。モヤモヤするんだ。昼間も、そのせいで訓練がうまくいかなかった」

メンテナンスついでに、昼間のことを話す。ヒメカワは聞きながらも手を動かすのをやめない。

「君は素直に話すねえ。なに、一目惚れしたの、リシアに？」

「一目惚れ？」

「一目見ただけで相手に強い好意的な感情を抱くことだよ。それほど珍しいことではない」

ヒメカワはコンピュータにデータ移行する傍らでコーヒーを淹れる。今夜は徹夜でもするつもりだろうか。

「オレは今までそんなことを経験したことがない」

「じゃあ初めてだね」

「ヒメカワはあるのか」

「私は大人だからね。いろんなことを経験してるのさ」

カイレンは開かれたままの胸に手をあてた。リズムよく刻まれる動力炉の鼓動を感じる。これも人間に似せて作ったのだとヒメカワから聞かされていた。

「ロボットの心は人間と同じで毎日每秒成長する。カイレンも例外じゃないってことだね」

今抱えている感情にどんな名前がついているのかは分からない。だがリシア、彼に特別な想いを抱いているのは事実だった。

「君は偉い。感情の揺れ動きをきちんと言葉にできた。ただのエラーだと決めつけなかった。カイレン、君は偉い」

ヒメカワはハッチを閉めて、メンテナンスを終了させた。コーヒーにありえないほど大量の砂糖を入れて飲んでいる彼女は、カイレンには理解しがたいものがある。

「そうだ、宿泊寮に戻ったらタンク君を呼んできて。あの子もメンテが入ってるんだ」

「タンク君？」

「チアカだよ。戦車に変形できるロボットなんて珍しい。ロマンがあるよ。私もああいうの作ってみようかな」

翌日の戦闘訓練、結果を言えばボロ負けだった。カイレンは見事に全敗した。よそ見をしていたとか、不調があったとか、そういうことでは決していない。むしろ体のコンディションは絶好調だった。それなのになぜこんなことになってしま

ったのかというと、リシアが見に来ていたからだ。正確に言うと、救護班としてスタンバイしていた。彼がそこにいると思うだけで手元が狂う。軍人として精神的動揺によるミスは許されないのに、カイレンはそれはそれはもう冷静さを欠いていたのだったのだ。

「お前マジにいかれちゃったのか？ らしくねえ」

「うるせーほっとけ」

「昨日ヒメカワ博士から聞いたんだが、お前、お花ちゃんにお熱なんだって？」

「あいつ喋ったのかよ」

チアカの冷やかしにもヒメカワの口の軽さにも呆れて怒る気になれなかった。これまで連勝記録を更新し続けていたのに、このザマだ。情けなさで泣けてくる。ロボットに涙はないが。

「まあこれで明らかになったわけだ。カイレンは仏頂面でニブチンだが、成長の余地は十分あるってな」

「チアカは煽るのがうまいな。ぶん殴りたくなってきた」

「お前のパワーで殴られたら顔がへこんじまうよ」

夕食の時にもカイレンは同僚たちに冷やかされた。誰かが言いふらしたのだろう。頭を抱えていたところ、後ろから肩を叩かれた。振り返るとリシアが笑顔で立っていた。

「今日もお疲れ様。頑張ってたね。隣いいかな？」

「あ、ああ。座れよ」

どうしてこういうときに限って。

「今日は調子が悪かったんだ。普段はあんなハマばかりじゃないんだ。オレだつて予想できるか、あんなこと」

言い訳がましいことを並べている自分に嫌気がさす。出会ったばかりで好感度もヘチマもないのにリシアの反応をうかがってしまう。リシアともっと話したい。声を聞きたい。

どきまぎしながら他愛もない会話をする。平静を装えただろうか。あつという間に時間が過ぎ、食堂にはもう二人しか残っていないかった。

「今日、談話室においでよ。僕は君と話がしたい。クッキーとか、お茶も用意する。明日はお休みなんですよ」

リシアはにつこり笑つて言った。カイレンの体にびりびりと電流が走る。

「君とは初めて会った気がしないんだ。二人でゆっくりしようよ」

「そうだな。じゃあ行くぜ」

逢瀬ともいえる約束をして、二人は別れた。

部屋に戻るとチアカがカイレンの分までベッドを占領して自己メンテをしていた。

「メンテしたばかりで、損傷もないのにやってるのか」

「俺も年だし、ガタがきてるんだ。今日は派手に動いたからな。今日の新型は明日の旧型っていうくらい、技術の発展は目覚ましいんだよ」

そういえばチアカは勤めて十年になる。十年も働いていれば人間で言うところと定年退職レベルだ。基準は用途によって違う

が、一般的なロボットはそうだ。

シャワーを浴び、人工髪を梳かし、装甲を取った素体の上にジャージを着る。人間とほぼ変わらない見た目だ。リシアと二人きりで話すにはラフな格好の方が落ち着くだろう。

「どこか行くのか」

チアカが聞いた。カイレンはそれには答えずに部屋を出た。

談話室のドアを開けるとソファにちょこんとリシアが座っていた。ネグリジェらしきものを着ている。ヒメカワの趣味だろうか、西洋人形のように可愛らしい。動力炉がオーバーヒートしそうだ。

リシアはティーカップに紅茶を注ぎ、クッキーを皿に並べる。チョコチップがまぶされていたり、ジャムが入っていたりとオシャレなクッキーだ。カイレンは甘党なのでこのチョコイスは嬉しかった。

甘い紅茶とクッキーを夜中に食べるという人間なら忌避するようなことも、機械である二人には関係ない。食べたものはエネルギーになる。そのエネルギーは今、この談話室を甘く満たしている。

「へえ、じゃあ君は僕がいなくて博士のところで暮らしていたんだね」

「暮らすと言っても身寄りのない俺を拾っただけだ」

「でもそのおかげで僕らは出会えた」

リシアの両手がカイレンの右手を包む。奇跡だといわんばかりだ。そしてそのまま頬にすり寄せた。

「大切な誰かを守る手。博士と一緒にとってもあたたかい」
沈黙が流れた。話題がないわけではない。ただ自分の中にある動力炉の音だけが聞こえている。リシアに手を握られたままだというのに、カイレンの心は夢の中のような平穩そのものだった。

いつの間にか日付を超えていた。的外れなアラーム音がカイレンを現実に戻していく。甘い紅茶とクッキーと、部屋いっぱいのがーべラの香りに酔ってしまった。帰らねばと立ち上がるとよろけて思わずしゃがみこんだ。

「忘れ物だよ、カイレン」

リシアがしゃがんだままのカイレンの前髪をかき分け、額に唇を落とした。

「え」

瞬く間に体中に熱が広がる。何が起きたかわからず、カイレンはフリーズしてしまう。その行為自体は知っていた。なぜリシアが自分にそれをしたのかが理解できない。知り合っていない、信頼関係がほぼ築けていない自分にするはずがないのに。

「いいことがあるおまじない。博士が僕によくしてくれるんだ」

しかし例えるなら暖炉のような。心の底から安心できる、そんな暖かさだ。自分より一回りも二回りも小さい少年が、愛する家族に贈るように暖かなキスをくれた。型番も用途も製作者もなにもかも違う赤の他人の自分に。

「おやすみカイレン、良い夢を」

季節は冬。カイレンとリシアが知り合って一年が経とうとしている。

「カイレン、そろそろ私の家に帰ってきなよ。あいつも君に会いたがってるんじゃないかな」

ヒメカワは雪の降る朝、そう言った。

カイレンが軍사용口ボとして働き始めてから四年、一度も実家に帰ったことがない。今は仕事が一番優先だし、特段そうする必要もないと思っていたからだ。しかし彼女にそう言われてしまったのは、カイレンは帰らなければならないだろう。

「仕事はどうするんだ。やめるわけにはいかないぞ」

「長期休暇をとればいい。上には私も相談しておくから。ロボット工学の権威とも言われる私に逆らえるわけがないよ、ね？」

半ば強制的形で帰郷が決定した。

電車の窓から見慣れた景色が流れていく。雪に色づけられた家々がマシユマロのようだ。

「まさか君と一緒に家に帰れるなんて思ってたよ」

カイレンの隣にはリシアが座っている。ピンクのボンチョを着て、可愛い。愛しさを覚えてカイレンはリシアの頭をなでた。二人の関係は、恋人、もしくは家族と呼ぶに相応しいものとなっていた。

電車乗り継ぎ、車に乗って都心から離れたヒメカワの家

に到着した。壁を這うツタ、古めかしい門はまるで魔女の家だ。懐かしさを感じてカイレンはため息をついた。

「さあついた。やっぱり自宅は落ち着くねえ」

ヒメカワは大きく伸びをして、リュックを床に放り投げ、ソファに寝転んだ。

「博士、自分の荷物くらい自分で片付けてください」

「今くらいいいじゃないか。後でやるからさ」

「そんなこと言っていつもしないじゃないですか」

カイレンは二人を羨ましいような、微笑ましいような、そんな気持ちで見ている。

「あ、あいつに挨拶しなきゃ」

ヒメカワは飛び起きて和室へ向かった。カイレンとリシアもそれに続く。

「ただいま。今日はカイレンもいるんだ。ずっと一人で頑張ってたんだよ、褒めてやって」

「……ただいまです、博士」

小さな棚の上にはフレイムに入った写真が一枚飾られている。写っているのはカルセ、カイレンの製作者だ。黒縁の大きな眼鏡をかけた女性である。

「ヒメカワ、少し一人にさせてくれ」

「いいよ。リシア、私たちは昼食の準備でもしておこうか」

しばらくカイレンは無言で写真を見つめていた。声が、体温が、彼女に関するものすべてが現実から失われて数年が過ぎた。

「博士、どうして俺に涙をくれなかったんですか」

カルセの訃報を聞いたとき、カイレンの周りの人間たちはみな涙を流した。いつもへらへらして悲しみとは無縁そうなヒメカワさえ、三日三晩泣き続けた。それに対してカイレンは、情緒プログラムが今ほど発達しておらず、涙も搭載されていなかった。大切な人を失った悲しみというものを表現できなかった。そんな彼を薄情だという人はいなかった。

「ヒメカワから聞いたことがあるんです。リシアには涙があるって。博士にも可能な技術だったはずなのに、オレには……」

フレイムの中の彼女は何も答えない。遺影には似つかわしくない仏頂面を浮かべているだけだ。生前は寡黙で、自分の心の内を表わすことは滅多になかった。そんな彼女の影響を受けたのか、カイレンも感情の乏しいロボットになった。

「カイレン、ご飯できたよ」

リシアの呼ぶ声がしてカイレンはダイニングへ駆けた。

昼食のあと、ヒメカワは地下の研究室へやり残したことがあるところもってしまった。

「ねえ、どこかに散歩しに行こうよ」

せっかく帰郷したのだから、とリシアが言った。

海沿いの町を歩く。カイレンたちは防塩加工が施されているので潮風で錆びる心配はない。どこへ行くでもなく、

「あの港公園でお話ししない？」

「ああ」

公園のベンチの雪を払い、腰かける。リシアが自分の手を吐息で温めるのを見て、カイレンはまるで人間のようだと思う。こういう彼の仕草に惹かれてしまうのはなぜだろうか。

「リシア、話したいことがあるんだろ」

カイレンがそう言うのと、リシアは困ったように笑った。

「やっぱり言わないでおこうかな」

「なんだよそれ。オレはお前の話なら何だって聞く」

「……悲しい気持ちになるかもしれないよ」

「それでもいい」

リシアはうつむき、カイレンの手をそっと握った。

「あのね、僕……」

沈黙が二人を支配する。相言いづらいことのようにだ。カイレンはリシアが言葉を紡ぐまで待った。これ以上ないくらい、待った。そして、時は来た。

「僕、明日廃棄処分なんだ」

告げられたたった四文字が理解できない。高性能の電子頭脳をもつてしてもその先の答えが出せない。否、出したくない。

手が震える。明日になれば自分の手の中にある小さなぬくもりは奪われてしまうのだ。奪われて、二度と戻らない。

「いやだ、いやだ、いやだ！」

「リシア、どこにも行かないでくれ」

たまらなくなつて、カイレンはリシアを抱きしめた。二度も失うなんて耐えられない。精一杯の懇願、カイレンの心か

らの祈り。

「大丈夫だよカイレン。実は僕、少し楽しみでもあるんだ。だって、もしかしたら今とは違う姿に生まれ変わるかもしれない。魚かな、鳥かな、それとも人間かな。そう思うと悪くないよ」

「……嘘だ」

「嘘じゃない」

いくらロボットとはいえ、死ぬのが怖くないわけではないだろう。だがリシアは死を怖がり怯えるような性格をしていない。これが運命だと受け入れてしまっているのだろうか。

「でもね」

リシアはか細い声で言った。

「処分されるのは受け入れられるのに、僕のことをみんなが忘れてしまうのは怖いんだ。博士や君は違うと思うけど、その他の人たちは？ きっと一体のロボットがいなくなったところで彼らの生活にはなんの波風も立たない。それがどうしようもなく怖いんだ」

人間のもとで働くことがただ一つの生きがいともいえるロボットにとって、支えてきた人間たちに忘れられるほど恐ろしいものはない。機械であっても、生きていた証拠が欲しいのだ。

「これから言うことは僕の最後の身勝手なわがままだよ」

「……言ってみろ」

「僕の動力炉をもらってほしい」

どくん。カイレンのなかで灼熱が波打った。抱き合ったままのリシアの機体からとてつもない熱量が流れ込んでくる。生きられるところまで生きていたい。カイレンとともに生きたい。そんな彼の想いが熱になって伝わる。装甲に薄く積もった雪を溶かしてしまえるほどに。

「なんだかプロポーズみたいになっちゃったね。まあ動力炉をつたっていても、いらないなら処分してもらうよ」

「いらないわけないだろ！ お前の大切なパーツなんだ。スクラップになんてできるわけがない」

カイレンはリシアの肩をつかんで言った。するとリシアは、顔をくしゃくしゃにして「泣いて」しまった。

うるんだ瞳、頬をつたう涙、さらには嗚咽までも人間そっくりだ。ロボットであるリシアをこれほどまでに人間に近づけるとは、ヒメカワはよほど強固なこだわりがあるらしい。

「リ、リシア……？　なんでお前泣いてるんだ」

リシアは答えず、自分の額をカイレンの額につけた。冷たい紺碧の石が当たる。

「何でもないよ。ただ嬉しいんだ。カイレンありがとう。僕の愛する人になってくれて、僕とっても嬉しいよ」

愛する人、その一つの言葉がカイレンの胸にじんわりと広がった。リシアにとって愛する人とは第一にヒメカワ、第二にカイレンなのだろう。しかし一番でなくとも、愛情を注ぐ対象にカイレンが選ばれていること、それが重要だった。

「……帰りは、手をつないで歩こう」

カイレンは映るものすべてを吸い込んでしまいそうなリシアの瞳を見て言った。

家に帰るとヒメカワが庭で雪だるまを作っていた。この国では珍しい二頭身の雪だるま。ヒメカワは二人に気が付くと、駆け寄って額に順番にキスをした。

「おかえり、私に黙ってデートかい？」

「最後の思い出づくりをしていたんです。僕のわがままをカイレンは聞き入れてくれました。だから博士、お願いします」

リシアはヒメカワに頭を下げた。

「本当にいいんだね？　カイレンも覚悟はできているかい」

「はい」

「それじゃあ、メカニックルームへ行こうか」

メカニックルームの寝台は二つ。リシアとカイレンはそこに寝そべり、電源を落とした。

「これから動力炉移植手術、名付けて『負けない愛がきつとある作戦』を実行する」

ヒメカワは眼鏡をかけ、手術を開始した。

リシアを初めて見たとき、電流が体中を駆け抜けた。どんなロボットなのだろう、彼と話す機会はあるのだろうか、もし仲良くなれたらきつとこれまでで最も大切な人の一人になるに違いない。そんなことを考えた。

風になびくりシアの髪の美しさに見惚れた春。装甲の熱で目玉焼きができそうだと笑いあった夏。休日にどんな映画を

観るかで喧嘩した秋。そして突然の別れを告げられた凍えそうな冬。喜怒哀楽のつまった、何物にも代えがたい価値の一年だった。

カイレンが目覚めたのは次の日の早朝だった。重たい体を起こして隣の寝台を見ると、リシアはいなかった。きつともう、日が昇る前に工場へ行ってしまったのだ。

「目が覚めたね。気分はどうか、変なところはない？」

そう言われてぺたぺたと体を触ってみると、胸のあたりに違和感を覚えた。見てみると、胸の中心にあの紺碧の石がはめ込まれていた。リシアのトレードマークだったあの石が、自分の胸に。

「……ぐ、ううつ、あああつ、リシア、リシア……！」

喉の奥がしみる。うまく言葉が出てこない。顔が熱い。苦しい。

視界がゆがんでいく。頬をなにか、冷たいものが流れていく。

「泣きたいだけ泣いていいよ。今の君には悲しみを存分に表現する機能が備わっているのだから」

頭ががんがんする。体中のネジが悲鳴をあげる。感覚センサーがまともに働かない。メモリーデータが入り乱れてぐちゃぐちゃになる。

「泣きながらでもいいから、少し昔話を聞いて。カイレン、君の体は特殊で構造を一から知る人間、カルセと私以外は開けないようになってる。それは君を廃棄処分から守るため

なんだ。ロボットの処分はまず体をバラしてから再利用できないような部品を残し、その他はスクラップにする。カルセはそれを拒絶した。わが子に等しいロボットを残酷な目に遭わせたくない、そう言ってね。君を軍用として設計したのも、軍所属のロボットは一番使用年数が長いからだ。せめて一年でも長く生きてほしいという生みの親の切なる願いさ」

ヒメカワは大きく息を吸ってカイレンを力いっぱい抱きしめた。

「機械の君にこんなことを言うのも変な話だけど、血は争えないなって思う。だって私とカルセも惹かれあい、リシアと君も惹かれあったのだから」

「博士とあんたも……？」

「そうだよ。カルセは無表情で無口で近寄りがたかったけど、実は誰よりも愛情深くて思いやりがあつて。何よりも瞳が輝いていた。私はそこに惚れ込んだんだ。素敵な人だった。でも、もう会うことはできない」

ヒメカワの声が震える。思い返せばあの日のヒメカワは泣くだけでなく食事もまともに取らず、寝ることさえもしなかった。愛する人を失った悲しみは消えることはない。それは人間もロボットも変わらない。

「これから私たちは心の中に空洞を抱えたまま生きることになる。心というものはとても厄介で、正直邪魔だ。カルセが複雑な情緒プログラムを組まなかったのも頷ける。それでも与えられたものを捨てることはできない。明日はどうやって

生きようか？　ねえカイレン」

「……忘れない。オレは、リシアのことも、博士のことも忘れずに生きる」

記憶の中に閉じ込められた者たちは、ゆっくりとその存在を暗闇の中に潜り込ませていつてしまう。だから彼らが潜り込もうとしているとき、『思い出す』ことで暗闇を照らしてやるのだ。思い出すことは忘れないこと。そのたび悲しみや後悔が襲っても、それを恐れてはいけない。

「涙をくれてありがとう、ヒメカワ」

さっき感じた頬を流れる冷たさは間違いなく涙だった。子どもっぽい発想だが、リシアと『おそろい』というやつだ。

「どういたしまして、カイレン」

大切なものが欠けてしまった、今までとは違う日々を歩む覚悟を決めるのは難しい。しかしそれでも残された者にはどれだけ拒んでも明日がやってくる。自分たちにできることは、その明日が希望に満ちた光る明日になるのを祈ることだけだ。

恋をする

県立鹿児島工業高等学校 三年

田畑有紀子

高校を卒業し、地元を離れて就職した僕は成人式のために約二年ぶりに地元に戻ってきた。

今働いている都市部の町と比べたら、とても小さい町。慣れたその景色を前にして、嫌でもここに帰ってきたんだと実感した。

もう二度と帰ってくるもんか。そんな思いで離れたこの町に帰ってきてしまった。あの時の信念を曲げてしまうよううで嫌だったけれど、雅臣の頼みだからしょうがない。

雅臣は小学校から高校まで、ずっと学校が一緒だった腐れ縁の友人。今は地元の大学で学生生活を謳歌している。奴から、「お前のことだから帰ってこないつもりかもしれないけど、成人式と同窓会くらい顔出しに帰ってこいよ。久々に会いたいんだから」

と連絡があり、しぶしぶ帰ることにした。地元を早く離れたかった、その一番の理由である「両親」には帰省中絶対に会わない。そう決めて、地元に戻ることにした。

同窓会に来ると言っていたくせにドタキャンなんて、雅臣め。高校の友人は、雅臣くらいいしかなかった僕は、一人会場の片隅で級友たちの姿を眺めていた。

大した思い出もない高校時代の級友たちだが、久しぶりにその姿を眺めるのもなかなか面白い時間だった。

まだ卒業して二年しか経っていないのに、髪を染めたり派手な格好をしたり、ピアスをつけていたり、みんな垢ぬけるのが早いなあと、それ程仲良くもない人たちの姿を眺める。各々仲の良い面々と楽しい時間を過ごしている級友たちは、僕の名前も顔も覚えていないだろうし、ここにきていることにも気付いていないかも知れない。

「悠人君」

そう呼ばれて、高校時代が一気に思い起こされた。高校三年間のうちで、高島という僕の苗字ではなく、下の悠人という名前に君を付けて呼ぶ人はたった一人しかいなかった。振り返り、その懐かしい声の主、美央さんの方を見る。

「変わってないね、悠人君」

「そうかな」

そう言う彼女は、学生の頃とは変わって見えた。メイクなのか、服装なのか。そんな今の彼女にかけるべき言葉が見つからなかった。

「美央さんは、変わったね」

「え？ 何それ」

彼女は少しの間をあけてそう言い、心底おかしように笑い出した。僕にはその笑いの理由がよく分からず、きょとんとしていた。

「それ、良い意味？ 悪い意味？」

「もちろん良い意味だけど」

「なんか悠人君っぽいな。すごく懐かしいこの感じ」

久しぶりにこんなに笑った。と言いながら、笑い続ける彼女。僕の言い方がそんなにおかしかったのか？ 未だに彼女の笑いの理由は分からないが、なんだかそれも美央さんらしくて、ますます高校時代に戻ったようだった。

僕は人との関わりが苦手なたちで、高校時代にできた友人と呼べる人物は美央さんただ一人だった。ちなみにこれまでの僕の人生の中でも、友人と呼べるのは彼女と雅臣だけ。

どうしてそんな僕が美央さんと仲良くなったのかというと、一つは彼女が社交的な性格だったからだ。高校一年の時、名簿順の席で後ろだった僕に、なぜか彼女が声をかけてくれたことが始まりだった。

もう一つは、二人とも映画鑑賞が趣味だったということ。映画鑑賞が趣味の同世代なんて今時少なくて、それが分かるや否や、すぐに意気投合した。

高校時代は二人でよく映画を観に行った。それまで僕は映

画と言ったら、親に連れて行ってもらうか一人でしか行ったことがなかったから、映画館を出てすぐに語り合える相手がいるということがとても嬉しかった。

僕は高校一年生の頃から、高校卒業後は働こうと考えていた。とにかく早く独り立ちして、自分の親との関わりを断ちたかったからだ。

一方で両親は、僕が就職すると伝えた時、まさに寝耳に水、という反応だった。両親は二人とも当たり前のように大卒で、僕自身にもそれなりの学力があったから、当然大学に進学すると思っていたのだろう。

それから両親は毎日のように、なんとか僕を説得して大学に行かせようとしてきた。それでも僕の就職の意思は堅かった。そして高校卒業後、収入の安定している県庁に就職し、実家を出て一人暮らしを始めた。

彼女は映画監督になりたいという夢を追いかけ、単身、アメリカの専門学校に入学した。その彼女の行動力には本当に驚かされる。高校卒業からの二年間は直接会う機会はなく、メールでやり取りをしていた。

美央さんはその専門学校を卒業し、この四月から日本の映画製作会社に勤めるという。二年ぶりに直接会った僕らは話が尽きず、最寄り駅までの帰り道もあったという間だった。

「ねえ、悠人君」

駅に着いた時、突然足を止めた美央さんにそう呼ばれ、僕も足を止める。

「私、高校の頃からずっと、悠人君のことが好きだったの。付き合ってくださいませんか」

始めは、それが僕に向けられた言葉だとは信じ難かった。これまでの僕の人生において無縁だった、今後も無縁だろうと思っていた「告白」を突然目の当たりにして、少しの間思考が停止してしまっていた。しかし僕が黙っているその間も、逸らさない彼女のその目が、本気なんだと訴えてきていた。「僕は、恋とか愛とか、そういう類のものがよく分からなくて、だから、美央さんの気持ちには答えられない」

ごめん、と言う僕の声を遮って、彼女がこう言った。

「それなら、私がそれを教えてあげるから、恋人とまではいなくても、傍にいさせてくれない？ 高校の頃みたいに、二人で映画を観に行ったりするような関係」

それは予想外の提案だった。

「美央さんは、それでいいの？」

「うん。それでもいいの」

だって、他に好きな人がいるわけじゃないでしょ？ それなら問題ないじゃない。そう言われ、僕はそれを受け入れた。

「それじゃあ私、あっちだから。今日はありがとう。また連絡するね」

そうしてそれぞれの帰路についた。時間にすればほんの数分の会話でも、僕の記憶に色濃く残る、初めて感じた「誰か

から自分に向けられた愛」だった。

次の日の夜は、雅臣と飲む約束をしていた。

「よう、悠人。久しぶり」

正直僕は、昨日ドタキャンされたことを少し根に持っていた。それなのに奴はいつものように屈託のない、少年のような笑顔でそう言った。

「お前な。久々に会えるって日にドタキャンするなんて。しかも僕には同窓会に行けって言ったくせに、自分はこないとか……」

「まあまあ、細かいことはいいいから！ 飲むぞ飲むぞ！」

そう言っただけで強引に話を遮られる。こいつの、こういうところも相変わらず変わってないなと思った。

雅臣と最後に会ったのも、一年前に雅臣が僕のところに遊びにきた時以来で、思い出話や近況の話が尽きなかった。

話の中で恋愛の話題になり、別に雅臣に隠す事でもないだろうと、昨日美央さんに告白された話をした。

「ええ!? 美央さんがお前に告白か。美央さんが高校時代、悠人の事好きだったのは気づいてたけど、まだ好きだったんだな」

「雅臣、美央さんが僕の事好きって分かったのか？」

「そりゃあな。お前らの近くにいたんだし。というか、はたから見ても美央さん結構分かりやすかったぞ。お前が鈍感なだけ」

自分が人より少し色々な面で鈍感なのは自覚しているつもりだったが、まさか美央さんに好意を向けられていたなんて一ミリも考えていなかった。

「それで、お前は付き合うの？ 前、恋愛はできないって言うってたよな」

「そうなんだよ。だから、付き合うんじゃないって『傍にいさせて欲しい』って言われて、OKした」

「そっか。でもこれを機会に、お前も恋を知るのかもな」

僕の家庭は、あまり普通ではなかったように思う。両親は二人とも医者をしていて、経済的にはゆとりのある家庭だった。しかし、仕事柄二人は家にいないことの方が多く、兄弟もいなかった僕はずっと一人で留守番していた。小さい頃は母が一、二時間だけ帰宅して夕飯を作り、それを一人で食べたり、中高生になるとお金だけ渡されて、自分で買ったり作ったりして済ましていた。そんな具合で家事も全般的にこなすようになり、おかげで一人暮らしを始める時困ることは無かった。

そんな忙しい両親が同じタイミングで家にいることは少なく、家族三人で過ごせるその貴重な時間を小さい頃の僕は心待ちにしていた。

しかし、僕が小学校低学年くらいの頃だろうか。両親は顔を合わせればすぐに喧嘩をするようになった。

喧嘩する親を前にして、子供はどうすればいいのか分から

ない。小さい子供にとって、親というのは絶対的存在であり、自分を守ってくれる大切な存在。そんな大切なものが崩れてしまうかもしれないという恐怖を、子供ながらに感じ取ってしまう。

喧嘩が始まれば自分の部屋にこもって、一人布団にくるまり、その喧嘩が早く終わることを願うばかりだった。

とにかくそんな家族から離れたくて、最短で親元を離れてそれなりの生活が出来る、高校卒業後の公務員という道を選んだ。

お互いの事が好きで、この先一生一緒にいたいと思うから、人は結婚し、家庭を作る。そのはずなのに、どうして毎日のように喧嘩するのか。喧嘩するくらいなら、離婚してしまえばいいのに。

どれだけお互いを愛していたって、どれだけお互いを分かり合っているつもりでいたとしたって、結局他人は他人。家族になんてなれない。結婚したってあれだけ喧嘩してしまうのなら、恋や愛という感情を抱かない方がいい。

世間一般からみてひねくれた考え方だということとは自覚しているけれど、僕はどうしても愛や恋を肯定的に捉えることができなかった。

そんな僕でも、自分のことを犠牲にして子供を育てる「親」という存在は偉大だと素直に思う。自分の場合も例外ではなく、生まれてから十八年間僕を育ててくれたのは紛れもな

く両親で、そこに僕に対する愛が一ミリもなかったとは思っていない。

それでも僕は「少なくとも両親のような人間にはならない」「あの二人とは縁を切りたい」と本気で思ってしまった。二人からもらった愛を、僕は二人に返すことができない。

そんな薄情な僕が、誰かを愛し、誰かに愛されていいものなのか。こんな僕が幸せになっていいものなのか。時々そんな事を考えてしまう。

僕が愛や恋を避けて今まで生きてきたのは、この二つが原因なのだと思う。

四月になって新年度も始まり、新人の指導などで慌ただし日常生活を送っている中、美央さんからメールがきた。内容は、今度の週末映画に行こうというもの。特に予定もなく、断る理由もなかったので、すぐに了承のメールを送った。

美央さんからの連絡が珍しい訳でもなく、ましてや映画を観に行こうという提案も、高校時代にも沢山あったことだ。それなのになぜか妙に美央さんからのメールを、二人で出かけるという予定を意識してしまう自分がいた。自分の中で、誰かから好意を向けられているという事がむずがゆくて、こんな気持ちになっているのだろうと思うことにした。

とにかく、美央さんに失礼のないようにしっかり準備しておこうとは思ったものの、彼女に、

「悠人君が特に観たい映画がないなら、私が観る映画決めて

いい？ きつと悠人君も好きな映画だと思う」

と言われ、特に準備することもなかった。ただ、美央さんに告白されてから、彼女への接し方は今まで通りでいいものなのか、疑問に思っていた。しかし今までの人生、他人との関わりを怠けてきた自分にそんな難しい問いの答えが出るはずもなく、疑問を抱えたまま、美央さんと出かける当日を迎えてしまった。

「お待たせ！ 待った？」

僕が待ち合わせ場所に着いて五分後、集合時間丁度に彼女がやってきた。

「そんなに待ってないよ」

「そっか。じゃあ行こうか」

その日観た映画は、アメリカのミュージカル映画だった。とある青年がコンプレックスを抱えながらも、幼い頃からの夢であるミュージシャンを目指すという物語。最近公開された若い監督の映画で、僕自身その監督も映画も知らなかったのだが、彼女の言っていた通りとても気に入った。後から話を聞くと、彼女がアメリカにいたときに知り合った駆け出しの映画監督の作品らしい。

映画を観た後は近くのレストランで昼食をとりながら、映画の感想を言い合った。あのシーンが好きだったとか、ここにこんな伏線があったのかとか、まるで高校時代に戻ったよ

うに思ったことを語り合い、映画の余韻に浸る。思えば、こんな風に純粹に映画を心から楽しんだのはいつ以来だろうか。出会った頃から思っていた事だが、彼女といると不思議と自然体でいられる。そんなことを考えながら話をしていた。

レストランを出て歩いていると、彼女が洋服を見たいと、ブティックの前で立ち止まったので、一緒に店内に入った。てっきり自分の服だけを見て回るのかと思ったら、メンズのコーナーに行き「ほら、この服悠人君に似合いそう」と言いながら僕の服を選び始めた。

「こんな服、あまり着ないな」

「あ、嫌いだった？ ごめんね、勝手に選んで」

「いや、嫌いじゃないよ。ただファッションに興味が無いから、自分じゃ選ばないなと思って。案外似合うかもね、これも」

その後も、自分の服を見て回る事より楽しそうに、僕に似合う服を探す彼女。あまりにも楽しそうだから、彼女が選んだ服のいくつかを買いおうと、レジにその服を持って行った。

「ごめん、気つかわせちゃったかな」

「美央さんがあまりにも楽しそうに選ぶから、欲しくなったの。僕センス無いから、また次の機会にも選んでよ」

そう言うのと、とても嬉しそうに笑顔で頷いた。

初めてのデートはそうして終わり、その後も何度か二人で出かけた。カフェ巡り、美術館、動物園、ドライブ。休日は

決まってアパートで過ごすだけだった僕を、アクティブに連れ出してくれる彼女との時間は、とても楽しかった。

二人で過ごす時間を重ねる度に、彼女の知らなかった一面を沢山見つけた。意外と辛い物が好きだったり、動物なら猫が好きで、今も一匹飼っていたり、ホラー映画やお化け屋敷は苦手だったり、夏より冬の方が好きな事や、シュークリームが好きなのも知った。逆に言えば、高校三年間友人として一緒にいたのに、彼女について知らないことが沢山あったんだなと気づいた。

そんな僕は、彼女の事をもっと知りたいと思い始めていた。

彼女との何回目かのデート。夏の暑さも和らいできた九月下旬の事。この日は彼女が観たいと言った、家族の絆を描いた映画を観に行った。

正直僕が一番苦手なジャンルで、できればあまり観たくないものでもあった。でもせっかく選んでくれた彼女の思いを無下にはできず、観ることにした。

「もしかして、さっきの映画あんまり好きじゃなかった？」
映画を観終わった後、いつものレストランでいつものように、映画の話をしながら昼食をとっていると、彼女にそう訊かれた。

「いつもならもっと映画の事色々話すけど、今日はあんまり話さないから」

なんとか悟られないように映画の話をしていたつもりだったけど、彼女にはすべてお見通しだった。

「あまり、あの手の映画は好みじゃないんだよね、昔から」

「そうだったんだ。ごめんね、付き合わせて。でも、嫌いなものは嫌いって、正直に言ってくれてよかったんだよ」

「そうだよ。でも、美央さんのしたい事をして欲しくて」「私こそ、悠人君のしたい事をしてほしいよ。それに、悠人君の事もっと知りたいから、何が好きで何が嫌いとか言っ
てほしいし、いつも遊びに誘うのは私だから、たまには悠人君がしたい事言ってくれてもいいんだよ」

美央さんの気持ちを知ってから、僕のしたい事じゃなく、彼女のしたい事を優先すべきだと考えていた僕は、彼女の言葉に凶星をつかれた気がした。

「もしかして、今までのお出かけも楽しくないことの方が多かった？ 我慢させてたかな」

「それは違うよ。本当に楽しかった。今も楽しい」

そう言うと、彼女はまだ少し腑に落ちない様子で、でも受け入れるしかないというように、少し微笑んだ。

雅臣に電話をした。美央さんを傷つけてしまって、自分は
どうしたらいいのか。僕一人では解決策が出てくる気がしな
くて、雅臣に美央さんとの事を相談することにした。

今までの美央さんとの関係の進展や、自分の恋や愛に対する
思い。自分の親の話などをした。

「お前はただ、傷つくことを怖がって、変化から逃げてる弱虫野郎だよ」

雅臣にそう一喝された。

「傷つくのが怖いから、恋をしたくない。恋をしたくないから、美央さんからの愛や、美央さんへの感情に正面から向き合わないで、気づかないふりしてる。今美央さんは、お前と向き合って、恋や愛っていう感情を教えてくれようとしてるんだよ。お前も一歩踏み出して、自分を変えるいい機会なんじゃないのか？ いくら美央さんだって、ずっとお前の事愛してくれてると思うなよ。人の気持ちは変わるんだから」

最近恋人に振られたらしい雅臣は、「いいなあ。俺も恋してえよ」と付け足した。

雅臣の言葉に、今まで自分は傷つくことから逃げてきただけだと気づかされた。

「親と縁を切りたいうて言ってるけど、勝手にその親に縛られて身動き取れなくなってるのはお前自身。親がどうか、まわりがどうかじゃなくて、お前は自分の意志で、自分の人生を歩むべきなんだよ。お前はどうしたいんだ？」

自分の気持ち。ずっと向き合ってたように思う。美央さんの為に自分に出来る事。ずっとそのことばかりを考えていた。

僕は、どうしたいのか。

雅臣と話した後自分でもよく考えて、美央さんに直接会って話がしたいと連絡した。今の自分の気持ちを包み隠さず話して、自分自身と、美央さんと向き合おうと。

自分のすべてを他人にさらけ出すなんて、今までの僕なら考えられないことだった。美央さんが待ち合わせに来るまでの時間。今までの人生で一番緊張した時間だったと言っても過言ではないほど、浮足立っていた。

まず最初に、自分の育った家庭環境や、今まで恋や愛から逃げてきていたという話をした。いい思い出話ではないし、正直どんな反応をされるのか怖かった。

「悠人君は幸せになっていいんだよ。そんなの、誰かに制限されるようなことじゃない」

美央さんはまっすぐ僕の目を見てそう言った。僕の嫌な部分を見ても、そんな部分もひっくるめて自分を認めてくれたようで、なんだか泣きそうになった。

美央さんも少し涙目になっていて、自分の目から涙があふれてしまっていることに気がついた。涙もろくて、すぐにもらい泣きしてしまう、優しい美央さんらしい。

「でも、もう逃げるのはやめる。ちゃんと美央さんの気持ちや、自分の気持ちに向き合うことにする」

「そっか」

美央さんは優しく微笑んだ。

「それで、色々考えてきたんだ。美央さんという時間はすごく心地よくて、ずっと続けたいのについて思う。美央さんとデートした帰り道で、もう次のデートが楽しみになってしまふ。美央さんのこともっと知りたいなって思うし、何をしたら喜んでくれるのかなって、僕なりに考えたりもする。この先も美央さんの傍にいられたらすごく幸せだろうし、美央さんのことも幸せにしたいなって思う」

こんなに自分の気持ちをさらけ出すのは、後にも先にも無いかも知れないな、なんて思いながら、少し恥ずかしくなってきた。

「色々言っただけど、つまり何が言いたいのかって言うところ……」
ここまで長く話してきたからなのか、この先の言葉を口にするのに緊張するからなのか、喉がカラカラだった。

僕は彼女に恋をした。

藍

県立指宿高等学校 二年

仲 絢万音

梅雨時には必ず、あの日のことを思い出す。目の前にある顔が一瞬にして滲む様が、頭の中で映像化されては、優しく胸を締めつける。

その人の魅力、好きなどころ。いくらでも挙げられる自信があった。そこには溢れんばかりの想いがあったから。きっと、全て伝えたら引かれてしまうだろうほどの重さだった。優しく、頭が良くて、何より笑顔が可愛い人。その笑顔の隣にいられたら、どんなにいいだろう。その人が自分を求めてくれたなら。叶わないことだと分かっていたけれど、どうしたってそう思わずにはいられなかった。どこにでも転がっていいような、ありふれた恋。それでも、未だにふと思い巡らすこれは、一生忘れることのできないものに違いなかった。

出会いは中学校時代、その人が転校してきた日。今思えば、その時から惹かれていたのだろう。徐々に挨拶の後に世間話をするようになって、一緒に登下校をすることもあった。家

が近くで話す機会が多く、親たちも意気投合し、家族ぐるみの仲となっていたのだ。そうでもなければ話しかける勇氣は出なかっただろうから、運が良かった。初めは転校生に興味津々な人達同様の視線だと自分自身思っていたものの、話すようになってからも自然と目で追っていたことを覚えている。その頃はその人を見かける度に笑顔になる魔法にかかったように、なんだか温かい気持ちで日々を過ごしていた。恋愛は片想いの時が一番楽しいとよく言うが、本当にそのような気がする――。

駅からの帰り道、思い耽っていると、突然肩に温度を感じた。

「ごめん、傘忘れちゃったから入れてくれない？」

「えっ、あ、うん」

「ありがとう！」

その屈託のない笑顔を見ると、口が勝手に動いていた。自分の頭は何が起こっているのかを処理出来ないまま。なぜなら、そこにいたのは先程も考えていたその人だったから。あまりの唐突な出来事に、話しかけられるまで思考回路は止まっていた。

「ね、久しぶりだね」

「あ、ほんと、久しぶり」

「変わってなかったから、後ろ姿でもすぐに分かったよ」

「そ、そうかな？ 大学に入ってから変わったねってよく言われるけど」

「え、あー、確かに髪型結構変わったね。似合ってる」

「えっ、あ、ありがとう」

実に、四年越しの再会。その人の親は通勤族だったため、学生生活を共に出来たのは一年間だけだった。こんなにさりと人を褒める人だったのだろうか。普段褒められ慣れていないこともあり、顔が火照るのが分かる。

「ど、どうしてここに？」

照れているのを誤魔化すように質問する。

「また越してきたんだよ、今回は一人でだけど」

「そうなんだ」

「うん。またよろしくね」

「よろしく」

そう笑顔で返したが、ぎこちなさが残っていたのではないかと気がついたのは帰宅後のことだ。それから、共に過ごした一年間の思い出話に花を咲かせていた。癖のある音楽の先生の話はいつも面白かったな、クラスの人気者の一発芸をまた見たいね、といったこと。あの頃に戻ったような、それでいてお互い会わない間に学んだものがあることを感じさせられるような距離感で、どこか他人事のような心地だった。

駅から徒歩十分ほどの距離に差し掛かったところだった。

「じゃ、家こっちだから。急だったのに入れてくれてありがとう」

「あ、ううん。またね」

「またね」

そう言って指をさしたほうへ走っていく背中を、しばらく見つめる。自宅の三つ先の曲がり角に消えたのを認めてから、向きを変えた。

家に入る前に、傘を閉じる。もうすっかり慣れた動作なのに、あの人と一緒に使った物だというだけで不思議な気分だった。扉を開こうとして薄い光が目端に映り、振り向くと、駅を出る時には無かったはずの晴れ間があった。

先程までの時間は本当に自分のものだったのだろうか。そんなことを考えながら片付けを済ませる。すべきことは色々あるはずなのに、なかなか手につかなかった。そして一日の終わり、湯船に浸かる至福の一時に、今日はその人のことを考える。またあの笑顔が近くで見られると思うと、自然と頬が緩む。しかし、叫びたくなるような感情があることも事実だった。自分で思う以上に嬉しかったのだろうかとも考えたが、それとは違う。

再会できたことを胸いっぱい感じつつも、頭の片隅に正体不明の違和感があることを認めざるを得なかったのだ。

ここ辺りにある大学は一つだから、あの人も同じだろうとは思っていたのだ。しかし、実際に同じ場所にいるところを見ると、何とも言えない高揚感のようなものがせり上がってくる。越してきたのはほんの数日前で、毎日来られるのは今日からだと話していたが、見かける度に周りに誰かがいたから、何ら心配は無さそうだ。自分はと言うと、その輪を遠巻

きに見て、余計に昨日の出来事が嘘のように思えて、目を伏せるばかりだった。

講義を受けて、友だちと話して、バイトをして、電車に乗る。普段通りの一日だ。最寄り駅に着くと、なんだか騒がしい気がした。そうか、雨脚が強いからだ。今年の梅雨は降水量が多く、最後の週である今週は特に大雨が続く、いつも口元を綻ばせているお天気キャスターが、淡々と言っていた。自分が思う梅雨の難点は洗濯物が乾きにくいことだが、そのお天気キャスターも同じことを考えていたのかもしれない。どうしたものかと水溜まりにしきりに描かれる円を見ていると、後ろから声をかけられた。

「そんな所に突っ立ってどうされましたか？」

「あ、いえ少し考え事を……」

振り向くと、そこには悪戯な笑みを浮かべたその人が。

「そうなんだ。俯いて、何か悲しいことでもあったのかと思った」

「いや、大丈夫、ありがとう」

「ううん。何も無いならいいんだ」

その人のはにかみ方は、変わらず優しさと可愛らしさがないじみ出ている。でも一層輝いて見えるのは、

「何かいいことあった？」

「えっ、どうして？」

「なんだか明るい気がしたから」

「あー、うん。あった、かな」

そう答える照れくさそうな表情を見て、ほんの少しでも期待した昨日の自分を罵ってやりたくなった。それはよかった、と努めて笑顔で返す。

「それにしても、長いこと降るね」

「そうだね。もうしばらく雨宿りしようかな」

「じゃあ、よかったら一緒に帰らない？」

「えっ、あ、うん」

見上げる空とは対照的な綺麗な横顔を盗み見ていた自分には、思いがけない誘い。

どうしよう、咄嗟にうんって答えてしまったけれど、気になる人がいるんだったらやめておいたほうがいいんじゃないかな。

「あの、嫌だったら断ってね？」

「え、嫌じゃないよ！」

考えているうちに、顔に力が入っていたみたいだった。

「そ、そっか。よかった」

少し驚いた表情でそう答えると、すぐにふにやっとした笑顔になる。可愛い……じゃなくて！ 気がつかれないよう慌てて頭から追い払う。

それからしばらくの間、気まずい空気が流れていた。いや、話に夢中になってからそんなことはなかったから、自分だけが意識しすぎていたのかもしれない。誘いを受けてから五分以上経つけれど、空は涙の速度を緩めることを知らない。弱まるのを諦めたのか、雨宿りをしている人の姿が減っている。

「なかなかあがらないね。濡れそうだけど帰る？」

「そうだねー、あ、でももう少ししたら雨雲が薄くなりそうだから、それまで待ってみよう」

と、雨雲レーダーを検索しているのだろうスマートフォンを見ながら言う。正直その人の気になる人に見られたらどうしようと不安に思っていたから、二人でいる時間を延ばすのは避けたかったのだけれど、思っているよりも自分は欲望に素直らしい。

「それなら待とうかな」

と答えてしまっていた。それからどのくらい経っただろう。二・三十秒弱まることは何度かあったけれど、なかなか止みそうにない。不思議に思っ自分も雨雲レーダーを見てみる。もう少ししたら、と言っていたのは間違いのようだ。

「まだ降りそうじゃない？」

と、自分たちのいる場所を指しながらスマートフォンを見せると、

「あれ、ほんとだ！　ごめん、前住んでた場所見てたみたい！」

と慌てる。その姿に思わず笑ってしまった。恥ずかしいのか赤くなっている。

「あ、ごめんね、失敗を笑ったわけじゃないんだ」

と言ったけれど、微笑が漏れる。感情を隠すのが苦手な自覚はある。友達によく言われる鈍感の自覚はないけれど。

「ごめん、自分から誘ったけど、一緒に帰るのはまた今度！」
と赤いまま焦っているような様子で、走り去ってしまった。

そんなに笑われるの嫌だったのかな、しまったなあ。

少し雨が弱まったタイミングで、一人傘をさして歩き出す。そういえば、あの人は傘をさしていなかったけれど大丈夫だろうか。

また今度と言っていたけれど、それはなかなか訪れなかった。それもそのはずで、三日間姿を見かけることすらなかったのだ。雨にうたれて体調を崩したのかと気になっていたけれど、連絡先の交換をしていなければ家の正確な場所も分からないから、どうしようもなかった。大雨となったのは、ちょうどその三日間。偶然か必然か、何かを予期しているかのようで漠然とした不安が募っていた。

夢をみた。いや、正確には夢をみたような気がする。鮮明に覚えている、泣きじゃくったあの日のことを。

その人に想いを伝えたいと、強く思ったのだ。理由がなくても隣にいていい権利が欲しい、ということ。一緒にと誘った帰り道で、話したいことがあると立ち止まった。すると、どうしたの、といった顔でこちらに向き直ってくれた。緊張が増し、鼓動はどんどん速くなり、終いには俯いてしまう。

言うって決めたんだ。落ち着け。

「……好き、付き合って欲しい」

言った。ついに言った。

恐る恐る、顔をあげる。

——ああ、だめなんだ。

その人の表情から、察してしまえた。目の前の顔が水彩画のように滲む。

返事、聞きたくない。

「ごめん、聞かなかったことにして、じゃ」

と、また俯いて泣いているのが分からないように必死に堪えながら言った。その後どうやって家に帰ったのかは覚えていない。

その日の自分の取っている講義は一つだけで、バイトも入れていなかったから、帰ってきてからは家で読書でもして過ごそうと考えていた。

ふと目を向けた窓の先には、小雨に彩られる淡い虹と、遠くにあの人の姿があった。その光景があまりに綺麗で、なぜと思うより早く、傘も持たずに外へ飛び出していた。その人のところへかけていく。輪郭がはっきりと見える場所まで行き、息を整えながら近づいていく。どこか遠くを見つめる背中、何を思っているのだろう、こちらに気がつく気配はない。足音が聞こえる距離まで寄る。その人が振り向くまでの数秒、時が止まる。

「あ、……」

表情から戸惑いが窺える。そう、まるで想いを告げたあの瞬間のように。でもどこか、決定的に違う。

「どうし……」

「実は、」

被せるように話し出す。

「ずっと話したいことがあったんだ」

こちらを見つめる瞳が、何かを決心しているような力強さをもっている。

「聞いて欲しい」

「う、うん」

「好き。初めて会った時から、ずっと」

「……え？」

「告白してくれた時も、本当は好きだった。でも、そのすぐ後に引越しが決まっていたから、遠距離で続くか不安だったんだ。引越してから、忘れられなくてやっぱり伝えておけばよかったって後悔したけどね」

そう自嘲気味に言い、

「泣かないでよ」

と、笑う。

「嬉しすぎて……。本当の本当？」

「うん。本当の本当」

「……っありがとう。今もずっと好きだよ」

「……ありがとう。でも、もうここまでなんだ。悩んでいたけれど、やっぱり伝えて良かった」

「どういうこと？」

聞いても、微笑むばかりで答えてはくれない。急に降ってきた幸福感と意味の分からない言葉に、混乱する。空を覆う

ほどの雲はないのに、雨は降り続く。

光で目がくらむ。その人が今にも消えそうで、手を伸ばす。「またね」そう動いた唇を見るが早い、光に包まれ、そして、どこかへ運んでくれそうな七色の架け橋に吸い込まれるように、消えてしまった。目の前に広がるのは雨に濡れた地面。手にあるはずの体温は、どこにもない。

その人がいた場所には、花束が落ちている。

理解した。なぜ突然消えたのかを。いや、消えたのではない。初めからいなかったのだ。花束は、この梅雨が始まる時に不慮の事故で亡くなったその人、瑞月を弔うもの。それを抱えて、涙せずにはいらなかった。

訃報を受けて、訳の分からないまま葬式へ行った時の映像が、頭に流れ込んでくる。遺影を目にした途端立っていられなくなつて、同じく連絡を受けたのだろう、当時瑞月とも仲の良かった友だちに支えられながら、会場をあとにした。家に帰りついてからのことや自分がその時何を思っていたのかは、何も分からない。恐らく、事実を受け入れたくなくて無意識に名前と共に記憶を消したのだ。それでも、初めてくれた感情とあの笑顔は忘れることができなかった。

再会したと思っていた日からふわふわとした気分で過ごしていた理由は、頭の片隅にあった違和感の正体は、これだったのだ。優しい瑞月のことだから、抜け殻のような自分を見兼ねて夢をみせてくれたのだろう。現実には考えにくいようなことだけれど、この時ばかりはそう信じていたかった。

ありがとう、瑞月。

この七日間が無かったとしたら、きっと思い出す度に苦しくなる恋として、黒く胸の中に残っていた。でも瑞月のおかげで、涙することはあったとしても、梅雨に似合う藍色の恋として覚えていられる。

気がつけば雨の音は耳に届かなくなっていた。見上げると、そこにははつきりとした虹がある。

この花束を持って、瑞月のもとへいこう。

漂流

県立川内高等学校 一年

福島嘉津穂

深夜二時頃から唐突に降りだした雨は、一向に止む気配を見せない。空には暗雲が立ち込め、轟音と共にやってきた雷が、私の住む下宿『恐竜荘』から電気を奪っていった。

大家の婆さんが当分電気が復旧しないことを告げて帰っていった。下宿の外は真っ暗である。私は有り合わせの懐中電灯とローソクで小さな明かりを作った。男の独り暮らしなのだからこれぐらいいいだろうと思い、机について、画集を引っぱり出して眺めながら、ボンヤリと物思いに耽っていた。

ひどい湿気で脳はふやけ、読み古した画集からはなんの感慨も浮かんでこなかった。何の気なしに窓際に目をやると、夜中に慌てて取り込んだ洗濯物の上に、一匹の蛞蝓（なめくじ）が乗っているのを発見した。ローソクの光に照らされて光沢を放つ蛞蝓は、こちらをじっと睨んでいるように見えた。

台所の方からは、耳障りな蠅の羽音が聞こえてくる。恐らく炊事場に起きつばなしの腐った林檎が集ってきたのだろう。腐蝕した林檎の甘くすえた匂いが私の鼻腔を刺激した。

なんともやるせない現状である。折角大学の講義が休みになったのだから、学生の本分である勉学に取り組もうかとも

思ったが、論文に目を通したとたん、束の間の勇気が冷め、すぐに筆を投げてしまった。

連絡を取り合うほど親しい友人も未だにいない。大学に通うために田舎から越してきてはや二か月がたつ。既にグループが出来上がっている研究室で私は一人孤立してしまった。友人を作るきっかけが無かった訳ではない。何度か明るく優しい人に声をかけられた。だがあまりに咄嗟のことで私は、「ああ」とか「ううん」とかなげやりな答えをしてしまった。結果、会話は長く続かず、優しい彼はにこにこしながらどこかへ行ってしまった。

矢張り、自分を変える必要がある。そう強く思った。己が行動すること、何かが変わってくれるはずだと。

私はすつくと立ち上がり、懐中電灯を手にして炊事場に向かい、赤茶色に変色した果実を生ゴミバケツに叩き込んだ。そのまま塩を一掴みみ手にとり、静かに洗濯物の山に近づいた。そうして私のトランクスの上に鎮座している蛞蝓へ、おもむろに塩を振りかけた。懐中電灯の無機質な光の下で、蛞蝓は、少しずつ萎んでいった。私は安堵の溜め息を吐いて、もとの場所に帰った。

しかし、雨は、相変わらず降り続け、部屋はじめじめと陰鬱な空気を溜め込んでいる。蠅はぶんぶん飛び回り、押し入れに生えたカビは、増殖して仲間を増やし続けている。

目の前に鏡がある。寝不足と疲労で腫れた己の顔面がそこに写し出されていた。笑う練習をしてみようと口角を上げて

みた。大の男が泣きたくなるほどの景色がそこに写っていた。

鏡を伏せて本棚に目を向け嘗めるように本を物色する。この時間のみが、私の唯一の楽しみだ。右から順に見渡していくなかで、ふと、目に映ったアルバムに手が伸びた。それは、中学の卒業アルバムだった。開いてみるとまず目についたのは卒業生の写真だった。その年の卒業生は確か二人。私ともう一人……『彼女』であった。後ろで一つにまとめられた黒髪は、小春日和の陽射しを浴びて真っ直ぐに垂れている。きらきら光る瞳、緊張で少し上がっている肩、そして恥ずかしそうにハニカむその口許。封印していた忌まわしく、甘っ辛い思い出が私の脳内に雨のように降り注いでくる。私は机上に突っ伏して、ポツリ、

「アホらし……」

と呟いて、一人赤面した。

私は小中学校時代をエス島という小さな島で過ごしていた。この島には、病院もなければ交番もない。コンビニはおろか商店すらない。本土との交通手段は週二便の定期船のみ。まさに絶海の孤島と呼ぶのにふさわしい島である。島の人口は百人ほど。この島の中学生はたった一人。私のみだったのである。

当時の私はここでも鬱屈とした日々を送っていた。学校に行って授業や部活を仕事のようになして家に帰る、その繰り返し。変わり映えのしない毎日。趣味は本を読むことくらい。

離島ならではの手付かずの自然と共に暮らせる、たとえば聞こえはいいが、いくら世間で「美しい」「綺麗だ」と言われている海でも毎日のように窓から眺めていれば只の大きな水溜まりである。珍しい鳥の鳴き声も機嫌の悪い朝に聞けば騒音でしかない。そんな日々になんかの亀裂が入ったのは、中学に入ってから二度目の夏休みが開けた頃のことである。

彼女は突然学校にやってきた。蝉時雨が降りしきるなか、少し汗をかいた彼女は床を見つめながら、ぼつねんと、教壇の前に突っ立っている。普段、先輩か小学生としか話していなかった私は、緊張と興奮で頭のなかが真っ白だった。何せはじめての同級生である。それも女子。

だんだんと恐怖が沸き上がってきた。(変なことを言って軽蔑されるんじゃないだろうか。そうなる classroom に二人つきりだから後々面倒だぞ……)

そんなことを考えているうちに、担任が彼女に自己紹介を促していた。

「それじゃ自己紹介をお願いします」

五秒ほどたった。彼女は動かない。オヤオヤと思っていると少し顔を上げて何か呟いたように思えた。だが、彼女の第一声は蝉の声にかき消されて夏のじめつたい空気の中に溶け込んでしまった。結局わたしが彼女の名前を知ったのはそれから三十分後。それもこっそり盗み見た彼女のノートに教えてもらったのである。この一日中よく観察していたがその間彼女は一言も喋らなかった。学校から帰る直前。私がトイレ

から教室に戻ると終始うつむいていた彼女が窓のそばにたつて眼下に広がる果てしない海を眺めていた。学校は高台にあるので窓から太平洋が一望できる。一人で海を眺める彼女の後ろ姿は、繊細で触れると壊れてしまいそうな危うさと美しさを持っていた。私に見られていることに気づくと、一瞬ビクツとしてすぐに驚かされた猫のように素早く帰ってしまった。私は一人、でくの坊のように突っ立って、

(サヨナラくらい言えばよかったナ……)

と間の抜けたことを考えながら彼女が立っていた窓際に向かった。外には、暗くゆらゆらと揺れる底の見えない大海が真夏の光を受けて静かに揺蕩っている。昔何かの本で読んだ「海は静かな女性を思わせる」という言葉を思い出した。当時は意味が分からなかったが今なら少し分かる気がした。

それから一ヶ月が立った。この一ヶ月で二点彼女について分かったことがある。一つは彼女が東京出身だということ。もう一つは、彼女が前の学校で色々あったらしいということである。詳しく何があったのかは未だ不明である。逆に言う和一ヶ月でこの二つしか彼女についての情報を得ることができなかったということにもなる。彼女は先生とも話さない。質問にも、頷くか首を振るか、時には反応を示さないこともあった。元々受動的な性質を持つ私がそんな彼女に近づけるはずがなかった。だが、ここまで秘密主義を貫かれると私の空想癖が黙っていない。

彼女は実はKGBのスパイで南西諸島の実際を調査してい

るのではないかと、新宿で名を馳せた最強のスケバンだったとか、他愛もない妄想をして、暇な授業時間を過ごしていた。なんにせよ彼女の持つミステリアスな雰囲気は、私の胸をときめかせた。

別段彼女に惚れたわけではない。これは恋心などとは違う一種のロマンチズムだと思った。人々が宝島を求めるような、未知なるものを追い求めようとする心。昼休み机に突っ伏して眠っている彼女を眺めているとなんだか新しい生き物を観察しているような気分になった。生ぬるい潮風が私の頬を撫ぜる。

いつのまにか冬になっていた。南の島の冬は長い気がする。冬が長いというよりも秋と春が短いというのが正しい。そのうえ刺すような寒さが荒れる波に乗ってやってくる。時化やすいのでこの時期の船は欠航や延期が多い。小学校の校庭では、子どもたちが半袖の体操服で駆け廻っている。

(元氣だなあ)

と思いながら、私は鼻を吸る。彼女は風邪を風邪を引いて休んでいる。彼女がいなくてもいつものように教室はしいんとしている。窓から外を眺めると海鳥が風に押されてあらぬ方向に流されている光景が目に入った。いつも海の上をすいすいと、人を見下すように飛んでいる鳥が、どんなに翼をはためかせても前に進めないその様子が滑稽で、つい笑ってしまった。

終礼の後に先生に声をかけられた。

「平田。悪いけど今日のプリントあいつに持っていつてくれないか？」

あいつとは、勿論彼女のことである。とりあえず了解してしまったが、どうしたものか。

彼女は今、親と離れて島の親戚の家に住んでいる。小さい集落だから近所といえど近所なのだが彼女の住んでいる家に向かうのは初めてである。プリントはどうでもいいような学校からのお知らせと、今月の給食献立表である。ポストに入れるだけでも良いのだろうが、気づけばインターホンを押していた。彼女がどんな生活をしているのか知りたいという下心が働いたのかもしれない。家の中から足音がする、一瞬の緊張。空気が一層冷たくなる。出てきたのは彼女の親戚のおばさんだった。用件を伝えると、

「あらあ、悪いわねえ。わざわざ持ってきてくれて。ちょっと待ってね」

すると大声で彼女の名前を呼び始めた。私が焦って、「大丈夫です大丈夫です。具合悪いでしょうかから」

と言うと

「いのよ。風邪とか言ってさっきまでピンピンしてたんだから。もうすぐ来るだろうから待っててね」

そう言って家の中に戻ってしまった。私は心臓を振るわせながら待っていたが、彼女はなかなか現れなかった。そのときである。背後の茂みからガサツと音がした。私はびっくりして、慌てて戦闘態勢についた。果たして、その音の正体は、

彼女の家で飼っている黒猫だった。黄色い鈴をつけてツンと澄ましている。

私は周りに人がいないのを確かめてしゃがみこんだ。

「よしよしよしカワイイデチュネー」

私は大の猫好きである。猫の頭をわしゃわしゃしてニヤついていると、突然目の色を変えた黒い生き物は、爪をむき出し、牙を剥いて私に飛び掛かってきた。私は吃驚仰天し、

「わぐろっしや——！！」

と奇声を発しながら倒れこんだ。憎らしい小さな悪魔は、倒れこんで阿呆面をかいている私を一瞥するとぼてぼてと歩いてしまった。寝転がりながら見上げた空はすっきりと晴れていた。すると今度は玄関の方から物音がした。戦闘不能に陥った私はゆっくりとそちらの方を向いて、絶句した。そこには彼女がしゃがみこんで苦しそうにしながら口許を押さえ、笑っていたのである。

その笑う姿のなんと可愛らしかったことか！醜態を見られてしまったことなど私の思考からすっかり消えてしまっていた。普段ボーカルフエイスを貫いている彼女の笑いは、尊く、私の心にじくじくと染み込んでいった。私はこれまでに感じたことの無い至福の満足を得た。この一瞬の全てを永遠に私のものにしたいと思った。初めて、彼女に一人の人間としてみられたような気がして、嬉しかった。

沈黙は一分ほど続いただろうか。私はやっと本来の目的を思い出した。

「これプリント。今日のあのー、ほら……休んだ分の！」

と、恋する小学生のようなつつけんどんな発言をしてしまった。彼女は、まだ微笑を口許につけたままプリントを受け取った。私は、

「それじゃ」

と、さも何事もなかったように立ち去ろうとした。すると彼女は、

「ありがとうございます」

そう言つて微笑んだ。相変わらず声は小さかったが、その一言は私の心の中で何度も反駁された。

「いえいえ。それじゃあ、お大事に」

なんとかそれだけ振り絞つて、私は彼女の住む家から離れていった。

帰り道、私の足取りはうだつの上がらないサラリーマンのように力の無いものだった。頭の中の記憶フォルダに重要機密として保存された彼女の笑った顔。これまで私は何をしてきたのだろう。遠くから彼女を見つめて、このままではストーカー予備軍である。どうして彼女と普通に関われないのだろうか。

「そんなこと言つたつて喋れないんだからしょうがないじゃないか！」

私の脳内評議会の評議員が声高らかに喚く。

「俺だって喋りたいんだよ！」

確かにそれは一理ある。普通に話せるなら何も問題はない

のだ。私に話しかける勇気がないことが原因だろう。

「だが、彼女もあんまり喋らなすぎではないか？」

「そこは、こちらからグイグイ行けばいいだけの話だろう。」

現に彼女は小学生となら、よく話しているじゃないか」

「小学生は、私とは別の生き物だ」

「皆さん落ち着きましょう。無理して喋ることは此方にとつても彼方にとつても得策ではありません。今日の彼女を見て思ったことは？」

「笑顔がかわいい」

「あれは尋常じゃなかったよ」

「もう一回だけ笑つてくれないかなあ」

「その通り。我々が望んでいるのは彼女の笑顔その一事に尽きます。彼女が笑うと此方も嬉しい彼方も楽しい、まさにウィンウィンつてやつです」

「それで、私は何をすればいいの？」

「彼女の為の道化師になりましょう」

山の向こうに沈んでいく夕日が、私の決意のように朱く燃えて周りの空気や雲を美しく染め上げている。太陽の反対側には、白く輝き妙な存在感を放つ月が顔を出していた。なんだか月にも笑われているような気がした。

その日の晩、母と話をした。私は学校での人間関係のこと等をよく母に話している。同世代の人間がいらないから愚痴もよくこぼす。彼女が風邪で休んでいたことや、彼女の家での私の一人相撲のことなどを面白おかしく語っているときだっ

た。母は、

「バカだねー」

と笑いながら、

「でも、あの子、前の学校で色々あったそうだけど、こっちにきてからよく笑うようになったんじゃない？」
と言った。

「その色々あったってなんなん？」

そう尋ねると、母は、少しまり悪そうに、

「人から聞いた話だけど、前の学校でちょっと人間関係がうまくいかなかったっていうか……まあ、いじめ？　みたいなものにあつてたらしいのよ。それで一旦環境を変えようってことで島に來たみたい」

なるほど、確かに來たばかりの彼女は、どこか怯えるような目をしていたような気がする。あまり喋らないのもそこに原因があるのかもしれない。いじめ。教科書やテレビでしかみたことの無い言葉。自分とは関わりの無いことだと思っていたが、その言葉の重さに胸が沈められるような気がした。

冬が終わり、三年生になった。受験という悪魔の禍々しい聲（あしおと）がだんだん近づいてきて、ことあるごとに私の胸を掻き乱した。当時の私には何故か勉強に対する根拠の無い自負があった。特に勉強に力を入れていた覚えはないが試験では高得点をとることができていた。高校に入ってからのはたった二ヶ月で成績が中の下まで落ちたことから環境が原因だったのであろう。島の学校、特にエス島のような極度に

小さい場所での授業は教師と生徒、一対一で行われる。つまり一人の生徒につききりで授業が進められるので学力は自然と向上するのである。

彼女はというと、かなり危ない橋を渡っていた。要するにアホだったのである。熟練の教師もてこずる筋金入りのそれである。白痴美というのだろうか。いやそれとは少し違う。

答案用紙が帰ってきた時に、無言で先生を睨み付ける彼女の、憂いと怒りを含んだ表情を見ていたら、私はつい口許を綻ばせてしまった。

嘲笑ったのではない。ただ、いつもは何事にも無感情な彼女がテストの点数ごときに頭を抱えていると思うと、それが、可笑しく、愛しく思えたのである。テスト中にこっちもさっちも行かずウンウン唸っている彼女もまた絶品だった。先生によそ見をするなど怒られただけの価値はあった。

だが、冬の日に見せた彼女の笑顔。これに勝るものではなかった。

受験勉強の合間、私はよく気分転換に散歩に出掛ける。歩いていると余計なことを忘れて自然の匂いや、家々のノスタルジックな雰囲気浸ることができた。彼女が、来るまでは。

陰気な竹藪の中に、錆びにまみれて崩れかかった廃屋がたたずんでいる。そこに一筋の光が差し込み、なんでもない鉄屑を幻想的なものにしていた。

歩きながら、もう一度あの笑顔を見たいなあ、と思う。だが、時計の針は、無情に進んでいく。どうせ卒業したら、彼

女とは、二度と会うことはないだろう。だからこそ、今のうちに腹一杯になるまで、彼女を味わいたいとキモチの悪いことを考えていた。

私はもう普通の人間のように生きていくことはできないのだ。こんな島で九年も一人で暮らしていれば解ってくる。同じ立場の人間がない精神的な孤独。他所の人間との価値観の違い。結局、私は劣っているのだ。一生この閉ざされた島の中でしか生きることができない。外に出たら、溶けてしまおうだろう。

塩かけられた、蛞蝓みたいに。

だから、せめて、今、目の前にある幸せを食いつくしたい。力づくでも彼女の笑顔が欲しい。その為なら最大限の努力をする。そう心の中では簡単に叫べるのだが、現実では口を開くこともできない。

なんだか馬鹿馬鹿しくなってきた。ほとんど舗装されていない道をゆらりゆらりと歩く。道の左右には、アダンの刺々しい葉が生い茂っている。どこまでも付いてくる太陽が鬱陶しい。今の私を俯瞰したらどう映るのだろう。一人の女の子に自分で、勝手に振り回されている。相手の素性を知らうともせずに、遠くから眺めて、ため息を吐く。

これこそ喜劇である。お笑い草だ。いや、それ以下の三文芝居。誰も笑いやしないね。

「……畜生」

と口に出して言ってみた。カモメが、

「ギャー」

と情けない声で泣いた。

塩の香りが鼻腔に纏（まと）わりつく。

臭い。

凸凹とした道が急に開けて、白い砂浜が現れた。隆起した珊瑚礁の向こう側には、海。

少し風が強い。足が小刻みに震える。

心の中で何かの山を越えたような、なにかが解ったような、そんな気が、ぼんやりと、した。

高校入試は、案外すんなりと終わってしまった。入試のために、本土の高校まで、船で十時間以上かけて出向いた。島には高校がないからだ。

推薦入試だったので、作文をチョチョイッと書いて、面接は事務的に、練習通りに答えた。怖かったのは、他の受験者である。受験会場に入る前、何人か知り合い同士がいるらしく、互いに「がんばろうね」と慰めあっている。

自分だけ独りであることへの疎外感と共に、受験という個人勝負の時さえ、他人と馴れ合っていないければならない彼らに、少し呆れた。彼女も前の学校ではこんな気分だったのかなと少し空想してみた。

彼女は、実家の東京の高校に通うそうだ。受験勉強もかなり頑張っていた。先生とも少しずつだが話せるようになり、自宅での勉強もよく頑張っていると誉められていた。

やっぱり、彼女も変わったなと思う。諸行無常をひしひし

と感じた。変わってないのは、私だけか……そう思うと心が荒れる。せっかく受験が終わったのに、腑に落ちない。

あの日。彼女が笑った日に浮かんできた情熱は、一体何処に行ってしまったのだろう。

そう考えているうちに、彼女と過ごせる時間も残り一ヶ月ほどになった。焦りは募る。それなら早く話しかけちまえ。何を迷う必要がある。人生、一期一会。この好機を逃せばもう彼女と会うことさえできなくなるぞ。

そう叫ぶ自分がいる。だがことはそう簡単じゃないのだ。心の準備が。タイミングが。そうこう考えているうちに、日常がいつも通りに過ぎていく。

そんなある日のことだった。中学校生活の思い出づくりということで、授業で、島一周を散歩することになった。面子は、私と、彼女と、そして中学部の先生方。先生らは、四十代のおじさま達なので喋りやすいし、授業がつぶれるのでかなり楽しみにしていた。彼女はというと、いつもの取り澄ました顔で、海を眺めている。

出発して三十分ほどたった。前日の雨は見事に消え去り、一点の翳りもない。ペンキで塗ったようにどこまでも広がる青い空。絶好の散歩日和である。

中学の思い出話は弾み、時折先生が彼女に話を振ると困ったような、恥ずかしそうにハニカんで見せた。私は、クラクラしたが、こんなもんじゃない。なにか違うと思いつながら歩いていった。ふと道端に目をやると、名案が転がっているのを

見つけた。私はそれを拾い上げ、ちよいと考えた後、ニヤリと笑った。幸運なことに、先生の群れは、とろとろ歩く生徒達を置いてさっさと先にいってしまっている。私は静かに先生と彼女の間に割り込んだ。標的を数学の山本先生に決めた。私はおもむろに、拾った名案を先生に向かって投げつけた。それは見事に山本先生の背中にくつついた。

先程、草藪のなかで見つけた名案。それは『オナモミ』という小さな植物の実であった。俗に『ひつつきむし』と呼ばれていて、実にいくつものフックが付いていてそれが動物にくつつくことで運ばれる変わった植物である。子供の頃は、これを投げ合って遊んだものだ。

さてここからが問題である。見ていた彼女に接近する。ちよつと笑っている。いいぞ。頑張れ、私。手にはオナモミの実。汗ばんだ掌が少し気持ち悪い。

「オオヤさんもやらない？」

初めて呼ぶ彼女の名。ちよつと男らしくて、最初、二度見してしまった彼女の名前。胸の底がヒヤリとする。

彼女は無言のまま、いたずらそうな笑みを浮かべてオナモミを受け取った。私も草藪から新しい兵器を採集してくる。遊撃手のように素早く計画をたてる。彼女の投げた一粒が放物線を描いて山本の背中に引付いた。私たちは、二人で無言のまま実を投げ続ける。にやにやしながら。

彼女がピッチャーのような素晴らしいフォームで投げ、私が静かに拍手を送ったときだった。奇跡が起きた。実が談笑

する山本の薄い頭頂部に引っ掛かったのだ！ 私は彼女が吹き出すところを初めて目撃した。

「先生、頭の上に……」

「アッ！ 背中にもこんなに」

バレタ。すかさず第二ステップ。

「せんせー、これまでさんざん宿題出してくれたお礼だつてナオヤさんが言ってますし……ウワッ！」

ナオヤさんの右ストレートがかすった。山本がこちらに向かって走ってくる。私はまだ睨んでくる彼女に、

「逃げよ！」

と満面の笑みで言った。

どれほど走っただろうか。かなり遠くまで来てしまった。彼女もついてきていた。二人きりになって、脳内のアドレナリンが急増する。ここからが本番だ。

「イヤー大変だったね」

ご機嫌斜めな彼女の瞳に私が映る。

「ナオヤさん、さっきから気になってたんだけど……頭と背中、ついてるよ」

不敵な笑みを作るよう意識する。彼女は両方にびっしりついているオナモミを確認すると、私を指差して「あんた？」というようなジェスチャーをした。私は頷く。そして逃げ出す。彼女は、自分についた実を投げてくる。

フィナーレだ。彼女に向かってアカンベをした後、走りながら、道の端による。そこは一メートルほどの崖になっている。

て落ちるのには絶好の場所だ。彼女とあの日の黒猫が重なる。

「わぐろっしや——！！！」

と叫んで私は一瞬宙を舞った。なるべく滑稽にそして自然に。受け身をとって着地。大きな水溜まりに尻餅をついてどろどろに汚れた。尋常ではない爽快感！ 彼女が落ちた私の生死を確認しにきた。彼女の顔も見ないまま、私は満面の笑みでピースした。

もはや自分でも、何がなんだか解らなかった。いつも黙っている同級生が突然暴れだして、彼女はドン引きしているだろうか。はたまた、普段とのギャップを笑ってくれるだろうか。至福か爆死か。恐る恐る、目を開く。

私は、胸を撫で下ろし絶頂の悦楽に浸る。彼女が声を出して笑ってくれたことだけに、深く染み渡る喜びを感じていた……。

いつの間に眠っていたのだろうか。ろうそくが消え、真っ暗になった四畳半の真ん中で私は目を覚ました。外では、まだ雨が降っている。暴れる風は朝よりも強くなったように感じる。なんだか変な夢を見ていた気分だ。頭がガンガンする。

結局あの頃の私は、何を求めていたのだろうか。ナオヤさんの何が私をあんなにも引き付けていたのだろうか。目の前に開かれたアルバムを見て思う。それが恋だったのか好奇心だったのか答えはわからない。ただ一つ、今解っていることは、それが今の私に欠如していることである。

蛇道を歩いていようが、外道を歩いていようが、心酔できるものを見つけて、ひたすらにそれを追いかける。これが、ひどく面白いものだったように思える。今の私にはそれが正しい。

それじゃあ探そうじゃないか！ この雨がやんだら。誰も与えてはくれない。私は、いや俺は独りだ。だからこそ心の底から酔えるものを探す必要がある。俺の人生を華やかにするのは俺の意思だ。

そう決意したときだった。ガツタ——ンと大きな音が外からした。窓を開けてみると、我らが恐竜荘の看板の『恐』の字が突風で打ち飛ばされて、惨めに落下していた。俺はなぜか無性に嬉しくなって今日の夕食はカツ丼にしようと呑気なことを考えていた。雨は一向にやむ気配を見せないまま、夜に沈みこんでいった。

パラダイバー

県立串良商業高等学校 三年

日高 翼

我々は、並行世界を発見した。並行世界は、様々な選択肢で選べなかった世界のことである。例えば、分かれ道が現れたとする。この場合、どっちへ行くか戻るかの選択肢が出てくる。その時、選ばれなかった選択肢が並行世界である。つまり、選択肢の数だけ無数に存在している。

今回、発見したのはそのうちの一つである。その世界は、平面的である。人やモノ、事象などを好きなように追加や編集ができるので、気に入った。

我々には、この世界と歩む資格はないようだ。なぜかと聞かれてもわからない。

しかし、一つだけ言えることがあるとするならば、のめりこむと並行世界が崩壊するということだけだ。

我々は、この世界が好きになり、のめりこんでしまった。その結果、崩壊した。我々は、信じられず世界をやり直した。次はうまくいくと信じて。

しかし、神はそんな希望を聞いてはくれない。そう、再び世界は崩壊した。崩壊のたびに幾度もやり直し、その数だけ

崩壊した。

何度目の時だっただろう。並行世界にのめりこまない人物に任せれば、この世界が崩壊しないと気が付いたのは。

そこで、我々はオーディションで世界を任せられる人物を選ぶことにした。集まった人物は、男女合わせて十一人だ。

試験は、主に謎解きである。なぜかという、この並行世界をタブレット端末に入れ、そこに何が必要か考える柔軟な頭脳などが必要だからである。

これと、我々にはない何かがないと崩壊する。我々には零と百しかなかった。

この試験は、我々や世界にとって良い結果をもたらす人物を探すものだ。その結果、一人の少女に任せることにした。

わたしは、星空月兎(るな)。推理小説や脱出ゲームやお菓子が好きな十九歳。普段は、キャンパスに行ったり、本屋さんを巡ったりしている。趣味が多いわけでもないため、退屈なことが多い。そんな時は、特等席である窓際のソファに座って、サイドテーブルの上にあるレモンティーをちびちび飲みながら、新聞を読んでいる。

たかだか新聞だろ？ とよく人は言う。特に、若い人が良く言うように思える。まあ、わたしも若いけれど……。

新聞を侮ってはいけない。ネットやテレビと違い、操作なしで情報を記録できる。あと、不謹慎かもしれないが世の中には、面白い事件や謎が沢山ある。だから、わたしの部屋は

様々な広げた新聞がいたるところに置いてある。部屋に来た友人が散らかりすぎだと注意するくらいだ。わたしが決まってるセリフは、

「散らかっていない。どの新聞がどこに置いてるか（…）把握している。」

わたしは、部屋にひろげっぱしの新聞を片付けて、サイドテーブルにアップルティーをおき、今日も新聞を広げていた。すると、おかしな新聞広告を見つけた。

「毛吾露理巴吾毛眼湯屋荷蘇乃、君環名。玖音蘇、…科梅星〇一二〇一五五五一六七八」

この広告を見たとき、わたしは笑みを浮かべていた。そう、これは暗号であり、その中身が怪しすぎる。解くカギではないかもしれない番号に、出るわけがないと思いつつもかけてみた。するとデタではないか!? デタといっても幽霊や妖怪ではない。機械の音声だ。

「パタラ株式会社オペレーティングシステム開発部門です。すぐに対応してほしい方は①を、このまま進みたい方は②を、お約束している方は③を、動作確認をしてほしい方は④を、おかけ間違いの方は⑤を、一から聞き直したい方は⑥を、遠隔操作をご希望の方は⑦を押してください。」

これを聞いてわたしは即答した。

「さくらもち!!」

わたしは少し笑ってしまった。理由は、暗号が有名だって

ことと、アレンジの仕方が面白いということだ。例えるなら、チーズタッカルビを挟んだサンドイッチだ。

最初の暗号の解き方は、ひらがなに変換する。

『けあろりはあけめゆやにその、きみわな。くおんそ、…かうめほし』

これを、電話番号を参考にして、文字をずらして解く有名なシーザー暗号で解読する。

『せかいをまかせられるひとぼしゆうばすこおど…さくらもち』

これだけではどうすればいいかわからないが、機械音声の謎を解くとわかる。

区切れたところで頭文字を拾うと次のようになる。

『パすこお動お一遠』

これを読みやすいように直す。

『ばすこおどおいえ』

話が脱線してしまった。さくらもちと答えた結果、

「よくぞ、暗号を解いてくれた。有望な君にぜひ会ってみた。最後の暗号はパタラ株式会社に用意している。なお、普段は人気のないビルなので自由に出入りしてもらって構わない。集合日時のヒントを今から伝える。メモをするがいい。虹のふもとの妖精を見つけることができる」とされる草を語呂合わせで表せ。では、幸運を祈る。」

と野太い男性の声で言った。なぜかその声は明るくも暗くも感じられた。

わからないという表情になった。

「この記号は、電光掲示板で流れてるものです。何かに気付かないですか？」

すると、何人かはわたしが気付いたことまではわかったようだった。しかし、わかった顔の後に難しい顔になった。

「なあ、そのメモ写真に撮ってもいいか？」

若い男がそう言うと、周りの数人も、

「私も、うちも、僕も」

と同調した。

みんなが難しい顔になってから、数分後、きれいなお姉さんが声を上げた。

「わかったあー!! 点字だあーこれえー!!」

すると、みんな納得したような顔になった。

「んで、なんて書いてあんだ？」

若い男が言うと、

「んー、か行とおーさ行しかあーわかんないからあーしかくっていうところしかあーわかんない。」

他の人も点字が読めないようだった。

しかくと聞くと、すごい筋肉の人が周りを探し始めた。

「何をしてるんだ？」

「しかくのなにかにカギがよいされてるっていうからかたっぱしからあさってるんだよ」

「ったく、これだから筋肉バカは」

「なんか言ったか？」

「いえ！ なにも」

若い男と言い争っていた。

そんなやり取りを、わたしは右から左へと聞き流し、お姉さんからわかるというところだけの点字を書いたメモをヒントに推測で読んでいた。

「えっと、共通しているところがこれだから、これが母音でー。そして、同じ文字を使用しているところを文章的に合うのを探すと……」

数分後……

「できたー!!」

みんな一斉にこちらを向いた。どうやら四角いものを調べていた人は、途中であきらめていたようだった。

「わかったのか？」

やはり、聞いてきたのは若い男だった。

「ええもちろん!! しかくのしょうかせんのよこをみろらしいです。」

そう言い切ると、みんなの頭上には、疑問符が浮かんでいた。

「それで、その四角い消火栓ってどこにあるんですの？」

その質問に対して、わたしは指をさして答えた。すると、大阪のアイドルっぽい女の子が、

「え？　うち？　うち、消火栓なんかもつとらんで」

そのノリに合わせてわたしは言った。

「あんたちやう!!　後ろの路地や」

若い男が言うには、路地も念入りに探したが何もなかったそう。しかし、わたしは不思議な違和感を見逃さなかった。

「ちよつと、消火栓の横を軽く押してみてください」

すると、いかにも修羅場をくぐってきましたという風貌の男が消火栓に歩いて行き、軽く押した。

周りの人は、軽く悲鳴を上げた。そう、手が落ちた。血のようなものまで滴っている。

しかし、動じていない人物がいた。そう、わたしだ。

「ふざけていないで、さっさと調べてくれる？」

悪びれる様子もなく、袖から本物の手を出して調べた。中を万遍なく探しているようだった。

「それで、何もなかったですが？」

そう、男は言った。

「その胸ポケットに入っているものは？」

わたしが指摘すると、

「私のマジックを見破るとは君は、すごいね。」

そう言う、鍵を投げ渡してきた。

鍵を開き中へ入ると、電光掲示板の表示が変わった。

【ようこそ！　パタラ株式会社へ!!　君たちを直接歓迎してあげたいのはやまやまなのだが、残っている仕事が山積みで

ね。君たちに会えないのが残念だ。これから君たちには、ゲームを行ってもらおう。なに、とっても簡単だ。縦か横に一方向に一回しか動くことができない。そのルールを破った場合失格とする。また、部屋に入ると自動でカギがかかる。部屋に謎があるときは、謎の答えをキー入力すれば鍵が解除される。あとは、やればわかると思う。さあ、天上に向かいし天馬に乗り、地獄の王と謁見せよ】

この文章を見て、わたし以外の人たちはエレベーターへと向かった。わたしは少し考えて一階を探索してから上に行くことにした。まずは手前の部屋に入ることにした。

部屋に入ると、扉がガタンと締まりカギがかかってしまった。大きな机に複数の椅子、ここは会議室のようだった。よく見ると、壁には液晶が埋め込まれてあり、カウントダウンとともに問題が現れた。

【 $7x^4 - 9x^3 + 6x^2 - 5x + 18$ を微分せよ】

よしできた！　答えを、入力してつと、

【 $12x^3 - 27x^2 + 12x - 5$ 】

というか、なぜ？　微分をさせられたんだ？　と不思議に思ったが、鍵が開いたので、二つ隣の部屋に入った。

次は、オフィスのようなところだった。今度は電子黒板が置いてあった。そこには、またカウントダウンが表示されて、問題が出てきた。

【次の漢字を読み。土竜】

さっきよりも簡単だなど思いつつ、解答した

【モグラ】

問題と答えをメモし、また移動した。

一階を探索して分かったことは、問題や謎は、電子機器に表示されることと、一回では謎が現れず小学校から高校までくらの五教科の問題が出されるということだけだった。次は、最上階の一つ下の階に行くことにした。

エレベーターに乗り、最上階の下階、七階に着くと目の前に部屋があったので入った。もちろん、入った後閉まりました。その部屋も、オフィスだったが、電子黒板はなかった。代わりにパソコンがコの字型に並べられた机の上に五台並んでいた。

そのうちの一つ、入って真正面のパソコンの電源がついていた。そこには、

【BQ5F:EXZITYR.S@42@Z】

わたしは、これを見て気づいた。キーボードのかな入力だと。パソコンがあったおかげで、文字にするのは、簡単だった。かな入力でパソコンの答え入力欄に打ち込んだ。

【こたえはけいさつにかんするどうぶつ】

どうやら、二重の謎らしい。

「うーん、警察に関する動物？ パトカーを海外でパンダカ一っていうことから、パンダかな？ それとも、警察犬っていうし、犬かな？」

独り言をこぼしつつ考えていると、謎の答えが思いついた。

そこで、パソコンに答えを入力した。

【ライオン】

すると、閉まっていた扉が開いた。

出たときに、参加者が目の前を通り過ぎて行ったが、その時に少し引いた顔をしていた。無理もないと思う。きつと、笑った表情だったから。

なぜ笑っていたかという点、ライオンという答えにたどり着く方法がなぞなぞという斬新なものだったからだ。謎を解くといってなぞなぞを解かなくてはいけなくなるだなんて誰が思いつくというのだろうか？

『百獣の王↓百十の王↓110の王↓警察の王』

そして、ほかにもいくつか部屋を回って英語や理科などの五教科の問題と、謎の問題を解いて行った。

問題を解いて行き、メモしていた答えの頭文字をとりアナグラム（並び替え）すると文章が現れた。

『鉄の箱ミラー一回叩いて戻れ地獄の門開かれる通れる人物一人』

それを見て、エレベーターに行き目の前の鏡をコンツ！と叩いた。しかし、何も起きなかった。

起きなかったので外に出ると、ジュイーンという音がしたので振り返った。

そこには、木製のドアがあった。エレベーターが消えた：

おそろおそろドアを開くと、そこにはとても広い会議室の
ような空間があった。なぜ会議室と思ったかというと、スー
ツを着た人たちが大きな円のテーブルを囲むようにして座つ
ていた。よく見ると、椅子がいか所開いていてスーツの人が
手招きしていたので、腰かけた。

そして、テーブルに置いてあるコップに口を付け一息つく
と話し始めた。

わたしは、首を振った。

並行世界を守護する組織に入って数年後、わたしは並行世界を一回しか崩壊させていない。

そんな世界を話が壊れないように私がコントロールしているのだ。魔法のペンで。

ただ、おおきく世界を変えると崩壊しやすくなることが分かった。

あまりにも怖くて目を閉じた。

周りをみると、人が空を飛んでいたりと、電気を放つネズミがいたり、顔が四角い人がいたり、とにかくめちやくちやだった。そして、わたしは思った。

(ここは、どこだ
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~)

わたしは並行世界に入り込んでしまったようだ。そして、今後中からコントロールしなくちゃいけないかもしれない。

## あまりもの

県立大島高等学校 二年

### 朝沼こころ

一見、黒くて汚い校庭の砂で埋め尽くされた地面でも、空が青くて晴れた日にじっくり観察しているとキラキラしたものが見えてくる。

『生徒の皆さんはクラスの名簿順に並んでください』

学校中の人の話し声の中で響く放送委員の声。生徒たちは今日の体育祭の予行の話、昨日観たドラマの話、部活がキツいという愚痴。いろんな話が聞こえると思っても聞かえてくる。先生たちが集まって来たのでさすがにみんな自分の列に並び始める。一人でずっと地面を見て意識を飛ばしていた私は、急に大きな音で鳴り響いた放送に心臓が跳ねた。私の苗字は横田だから名前順はいつも後ろの方だ。毎年そのせいで少しでもラジオ体操をダラダラしていると、後ろに威厳のある風格を漂わせ立っている社会の吉田先生に怒られる。

「空音さん、肘をちゃんと伸ばす」

女の先生なのに声が低くて余計怖い。後ろだから前の人たちの体操も全体的に見渡せる。他にも、私より遥かにやる気がない様子でやっている人がたくさん見える。

なんで私だけに。

開会式の予行が終わり、私はいつものように沙羅と莉奈の許に行こうと目をやった。あの二人はもう一緒にいる。水筒を開けながら楽しそうに話す二人を見て、行くのに躊躇してしまう。

今日の朝、三人で登校していた。沙羅と莉奈は家が近いから私は後から坂田橋の上で合流してからいつも一緒に学校へ向かう。

「ねえ、何話してたの？」

この私の言葉からいつも三人の会話は始まる。二人は私を待っている間に当然何かしらの事について話してただろう。もしかしたら私の悪口を言ってたかもしれないと怖くなることもあるけど、私は後から来たのだから二人の話題についていかなくてもならない。通学路の道は狭い。左側は自転車も通る。だから歩道は二人までしか並べない。いつも後ろに行くのは私だ。沙羅が右で莉奈が左。そして私が後ろから喋りかける。これが三人のいつもの定位置だ。正直後ろから会話を混ざるのは難しい。ほとんど二人の話を聞いているだけになってしまう。そしてたまに喋らなすぎかなと焦った時に無理矢理でも話題に入っていく。

「ねえ、何話してたの？」

水筒をクラスのカゴに入れ、大声で笑っていた二人に重い

気持ちをおのの方へやり、笑顔で話しかける。

「聡が応援団に入ってたって話してたの。超ウケるよね」

莉奈がいつも自慢してる黄色で星の刺繍が入ったタオルを弄（いじ）りながら笑う。

「ほんとやばいよね。あいつまじ根暗でガリ勉なくせに」

沙羅は周りに聞かれることも気にしてない感じで大声で乗っかる。沙羅と莉奈はクラスの中だけでなく学年の中でも人気者だ。女子だけじゃなく男子の友達も多い。二人の中でも莉奈が上だ。ここで言う「上」と言うのはカーストが上ということであり、言い換えれば人気度が上ということ。

学校では見えない格差というものがあるらしい。小学校の頃はその言葉自体知らなかったが、中学くらいから、なぜかそういう空気が読めるようになっていた。

「いつも思ってたけど、横田さんが莉奈と沙羅とつるんでのって意外だよな」

そう私たち三人の前で言い放った、西田愛という女子がいた。空気を読ませることは得意なのに自分は読まないのかよと心の中では言ってるが、現実では下手な愛想笑いしかできなかった。そして私にだけ苗字で、しかも「さん」付けなところが嫌みったらしい。

「ほら、応援団の演舞始まるよ。行こう」

「ちよっと、待って」

テントに真っ先に行った莉奈を沙羅が後を追った。私も笑顔で追いかける。でも前みたいに二人という時に本心で笑え

なくなっている自分にもう私は気づいていた。

朝の会が終わってから着替えて校庭に向かう。更衣室で三人で着替えながら今日の予行の話をした。

「ごめん。私と沙羅、トイレに行きたいからさ、そこで待ってるね」

沙羅は「行こう」と莉奈に言い、水筒とハチマキを持って更衣室を出た。二人より着替えが遅かった私は二人の後ろ姿を見送った後に急いで着替えた。

トイレに行くと、もう二人の姿はなかった。心臓の音が明らかに速くなるのを感じ、どうしてだろうと頭を巡らせた。何かの間違いだ。私が聞き間違えたのかも。先に行ってるって意味だったんじゃないか。

だからこうして私に普通に接している二人が怖い。さっきのことに関して謝りもしなければ、無視もしてこない。莉奈と沙羅が何を考えているのかが分からない。

「どう思う？ お母さん」

学校から帰ると私は誰かに愚痴を聞いてほしい衝動を抑えきれなかった。

「あんたね、考えすぎよ。そんなことくらいでいじけるんじゃないの」

お母さんは黒いスーツを来たまま食器を洗っている。水の流れる音よりもお母さんの声は大きかった。しまった。より

によって機嫌が悪い時に話してしまった。

「私、これ終わったらまた戻らないといけないから、空音、洗濯物干してね」

玄関で立ちながら黒いハイヒールを片方ずつ履いたお母さんは、私にそう告げると急いで行ってしまった。お父さんは単身赴任中で今は大阪にいる。私は昔からお父さんと仲が良かったので少し寂しい。お母さんは家の事をしながら文房具の会社で働いている。だから朝六時に起きてから夜の十二時半くらいまで一日中動きっぱなしだ。私は子供ながらに大変そうだなあと日々感じながらも、前より二人で話す機会が減ってしまい少し寂しい気持ちでもあった。

九月はまだ夏休み明けだから夏なのか、それとも、もう翌月、いやあと一週間で十月だから秋なのか分からない。公園に立っている木々はまだ緑色だけど、半袖の隙間に入ってくる風は少し冷たい。気象庁の人に聞いてみれば真面目に正確に教えてくれるだろう。でも、そういうことではない。スマホで検索するでも、人に教えてもらうこともしたくない。そうしたらつまらない。すぐ答えが出てしまう。でも莉奈たちという時はそんなことは口が裂けても言えない。あの二人はすぐにスマホで調べる。社会の宿題を一緒にやった時も、あの俳優の名前を忘れてしまった時も。

そんなことを考えながら歩いていたら、いつもの場所についていた。正子ばあちゃんの駄菓子屋さんだ。この辺の小学

生や中学生を中心に人気のあるお店で、私は小学三年生の時から正子おばあちゃんと仲良くなり、一人で来ることが多かった。

「まあ、空音ちゃんじゃない。いらっしやい。最近見なかったけど大丈夫かい」

腰が曲がった正子ばあちゃんは白い杖を突きながら、お店と家の境目の結構高めの段差を降りてくる。

「ずっと体育祭の練習とかがあったから来れなかったの」

普通だったら自分の買う駄菓子を選ぶとこだが、私は当然のように奥にある家に上がった。私は小学校の頃からずっと本当のおばあちゃんの家のようにこの駄菓子屋の奥の家に遊びに来ている。奥の家というのは普段から正子ばあちゃんが住んでいる古い家だ。私はこの古さが気に入っている。友達と最近のドラマの話や町に買い物に行ったりするよりも、ここで正子ばあちゃんの若い頃の話や、駄菓子屋に来る小学生達がくだらない喧嘩をしていたという話を聞いたほうが楽しい。いわば、ここは私の避難所だ。ここで宿題やテレビを観たりなんかもさせてもらっている。

ただ、今日はいつもと違うことが起きていた。畳の床に座布団、古いテレビとテーブルの上の饅頭。そのお気に入りの空間に知らない女の人があった。東高の制服を着ている。テーブルの上には食べかけの饅頭の袋が置いてあった。

「空音ちゃん、この子は洋子ちゃん。昨日、泣きながらウチに来たもんでね」

泣きながらという言葉に驚いた。私は中学生だから高校生は大人で泣いたりしないものだと思っていたからだ。それに和菓子を食べているのに、洋子という名前なのかと我ながら意味の分からないことも頭をよぎった。

「こんにちは。私は横田空音と言います」

年上で、初対面の相手ではあるが、それにしても堅苦しい挨拶になってしまったかもと一瞬焦ったが、私の避難所（勝手に思ってただけ）に突如現れた人だ。礼儀正しく慎重に観察しなければ。

「私は清水洋子。よろしくね」

彼女は柔らかな笑顔を浮かべた。私とは比べ物にならないくらい髪が長く、艶があり肌がすごく白かった。モデルをしているのではないかと思うほどに細い体に東高の可愛い制服を身に纏（まと）いながら笑いかける姿は私とは次元が違うなと思った。

「っていうか正子さん。泣いてたこと言わないでよ。恥ずかしいでしょ」

洋子さんは口を尖らせ可愛く怒ったような顔を作った。

「あら。ごめんなさいね。昨日あまりにもびっくりしたものだから」

正子ばあちゃんは洋子さんの隣に座りテーブルの上にあった栗饅頭に手を伸ばし、洋子さんは食べかけだった饅頭に視線を戻した。私は正子ばあちゃんに店の方はいいかと聞こえたが部屋から店の方を見ると珍しく誰も来ていないこ

とに気づいて止めた。

「洋子さんはどうして泣いてたんですか？」

初めて会ったばかりなのに失礼かとも思ったが、このオレンジ色の夕日が差し込む和室という和みすぎた空気に吞まれて聞いてしまった。

「空音ちゃん、私のことは洋子でいいよ。正子さんに聞いてもらうつもりだったから空音ちゃんも聞いてくれない？ 私、誰かに聞いてもらわないと今にも怒りが爆発しそうからさ」

彼女は冗談よくまた笑ったけれど、さっきの笑顔より少しぎこちなくなっているのが気になった。正子ばあちゃんは何も言わず、私と彼女のためにお茶の準備を始めた。

「まあ、簡単に言えば親友と好きな人が被ったんだよね。それで昨日その子と喧嘩になちゃって」

高校生らしい悩みだなと思った。恋愛のことで泣くなんて恋愛経験が皆無の私には理解できない。でも私は高校生の恋愛事情にとっても興味が湧いた。

「洋子ちゃんの好きな人ってどんな人なの？」

流石に呼び捨てにはできなかったが「ちゃん」付けをすることと敬語を使わないことに成功した。

「恋バナになっちゃうんだけど、その人は一緒にいると落ち着くし、私が一人でいる時も気にかけてくれた」

洋子ちゃんは耳が赤くなりながらも興奮気味に話してくれた。最初はお嬢様っぽい見た目から大人しそうに見えたが、初めて会った私にこんなことまで話してしまうほどの人懷つ

こさがあった。

「洋子ちゃんは親友と喧嘩したとしてもその人が好きなんだね。すごいよ」

私が同じ状況になったら、相手が莉奈や沙羅だったら私は気を遣って諦めてしまうだろう。

「だってさ、しょうがないよ。親友と同じ人を好きになったからって自分の気持ちを無かったことにはできない」

洋子ちゃんは凄く強い目をしていた。悲しさが混じった強い目だった。

「そう思ってたけどさ、諦めなきゃいけなくなったんだ」

「え、どうして？」

「親友と私の好きな人が付き合ったみたいで。それを今日知ったんだよね」

その瞬間、洋子ちゃんの顔が一気に赤くなって綺麗な顔がクシャクシャになった。そして静かに泣き始めた。

「あらまあ、大丈夫かね」

正子ばあちゃんは笑って洋子ちゃんの方に机の上にあったテッシュの箱を寄せた。私は驚いて何かしなくてはと思ったが、自分が何かするのも間違っている気がして正子ばあちゃんに背中を摩られている洋子ちゃんを呆然と眺めていた。

体育祭は何事もなく終わった。あの二人とはいっても通りだったし、短距離走もいつも通り後ろから二番目だった。部活にも入ってなくて、運動も勉強も中の下なのが私なのだ。

「見てよ。彩葉また一人で帰ってるよ。体育祭の日なのにかわいそうなんだけど」

体育祭の片付けがやっと終わり三人で帰っていた時に莉奈が私たちの前で背中を丸め歩いていた一人のクラスメイトを指差した。

「なんかいつも一人でいるよね。恥ずかしくないのかな」

沙羅がお決まりのように共感の言葉を続ける。こうなったから私も何か言わないといけない。

「私、一人とか無理だわ」

この言葉が相手に聞こえてませんようにと願うばかりだ。沙羅と莉奈の声は確実に相手に聞こえるように言っている声量だったが。頭が焼けるような暑さとうるさいカラスの鳴き声が自分の本心を押し殺して相手を傷つけ自衛する私を責め立てるように激しくなった。

学校の体育祭の雰囲気収まった頃、私はまた駄菓子屋に行った。放課後の体育祭練習が終わったからか、同じ中学の人がたくさんいたので裏口から入ることにした。前に正子ばあちゃんには了承を得ているので不法侵入ではない。裏口に入るとキッチンが出迎える。居間に洋子ちゃんがいるかと思ったが誰もいなかった。奥に見える店の方では正子ばあちゃんが中学生男子達の会計をしていて忙しそうだ。居間の横のタンスや押し入れがある部屋を覗くと洋子ちゃんがヘッドフォンをつけてピアノの前に座っている。こちらの足音に気付

いたのか洋子ちゃんはこちらを振り向いた。

「あ。空音ちゃん来てたんだ。ごめん、集中しちゃって」

私はいつも和室に電子ピアノがあるのに少し違和感があったが、洋子ちゃんが座っているだけで華がある空間になっている。

「洋子ちゃんってピアノ弾けるの？ 聞いてみたい」

「今、駄菓子屋さん結構お客さん来てるみたいだから後でだったらいいよ」

そう言って笑う洋子ちゃんは可愛いお姉ちゃんのように、一人っ子の私は洋子ちゃんのような姉がいたらなと妄想してみよう。そうだったならお母さんもお父さんもない家でも楽しいだろう。

「そうだ、空音ちゃん。お店の方まだ忙しそうだし、私と海でもいかない？」

「海ってその道路沿いところ？」

「そう。私いつも通る度に行ってみたいと思うんだけど、結局まだ行けてないからさ」

「そうなんだ。もうすぐ夕日が見られる時間帯だと思うし、私も行きたいな」

私がそう言っていると洋子ちゃんは嬉しそうにもう荷物をまとめ出した。私が正子ばあちゃんに出かける事を伝えるとラムネの瓶を二つ渡して飲みなさいと言ってくれた。

「そう言えばさ、洋子ちゃんは好きな人とどうなったの？」

海に着いて正子ばあちゃんからもらったラムネに少し口をつけ、洋子ちゃんの機嫌を伺いながら慎重に聞いた。洋子ちゃんは顔色を変えず今までの微笑んだままの顔だった。

「最初はそりゃあショックだったけど朋花が幸せならいいかとも思えてきたんだよね」

洋子ちゃんはその言っているとラムネをすごい勢いで飲んですごい勢いで咽せた。

「友達ってさ、恋人みたいなところもあると思うんだよ。だから朋花を失った感じもして寂しかったのもあるかなって」

「分かるかも。私、その感じ知ってる」

横を見ると洋子ちゃんのラムネはもうとくに無くなっているのに、私のはまだ半分以上も残っている。洋子ちゃんはどう？ という顔で私を見ている。

「私さ、いつも一緒にいる友達が二人いて、私だけついていてくれないっていうか……最近私がいてもいいのかなって思っている横にいるんだ」

自分で言いながら涙声になっていることに気づいて恥ずかしくなった。私は人に重めの相談をする時、辛かったことを思い出して喉が締めつけられて話すのが苦しくなる。

「自分は二人からしたら余り物なんじゃないかとか考えちゃって。でも一人になるのも怖い臆病者だから……」

気付いたら声が出せなくなっていて後ろから洋子ちゃんの手が温もりを感じた。そこまで悲しいと思っていたわけじゃないのに、ずっと苦しかった人の様な泣き方をしている自分

に驚いた。自分の鳴咽した声と、さつきより荒くなった波の音だけが耳に響く。

「今の空音ちゃんの話聞いて思ったけど私たちが余り物なんだとしたら、それって逆に良いことじゃない？」

私は洋子ちゃんの言っている意味が全く分からず赤い目を擦って首を傾げた。

「私、朋花と颯太が付き合ってから少し二人と距離を置いたの。避けるとかじゃなくて普通に接して執着するのをやめたって感じ。そしたら自分が少し自由になった気がした」

「怖くないの？」

「最初は勇気がいるけど一人になるって楽だし自分でいられるなって気づいたの。だから空音ちゃんも無理して人に合わせることはないよ」

洋子ちゃんは私の背中を少し強く叩いた。その瞬間、人の気配が消えた気がして横を見ると洋子ちゃんがいなかった。私の飲みかけのラムネの瓶だけが砂浜の上にあって波の音しか聞こえない空間が怖くなった。海辺をあちこち探しても見つからない。もしかしたら私が一人になりたいと思って気を遣って先に駄菓子屋に戻ったのかもしれない。

「正子ばあちゃん。洋子ちゃん戻ってきてない？」

「洋子ちゃんって誰？ 空音ちゃんのお友達かい？」

「え、何言ってるの？ さつきまでピアノ弾いてて、この前すごく泣いてた洋子ちゃんだよ」

「空音ちゃん、今日運動会だったから少し疲れてるのかい？ 夢でも見てたのね」

正子おばあちゃんがおかしい。変なことを言っている。おばあちゃんも歳だし忘れっぽくなったのかな。

次の日、またその次の日も洋子ちゃんは駄菓子屋には来なかった。正子おばあちゃんも思い出してはくれない。だから私は東高校に行ってみることにした。けれど正門の前でずっと待っていても洋子ちゃんが通り過ぎる気配がなかった。

「西中の制服だよ。誰か待ってるの？」

優しいような女子高生に話しかけられてしまった。

「清水洋子って人なんですけど」

「え？聞いたことないな。晴は知ってる？」

「ない。違う学校の子じゃない？」

私は戸惑ったが教えてくれた二人にお礼をして家に帰ることにした。正子おばあちゃんの様子と東高の生徒のあの感じからして洋子ちゃんが最初からいなかったみたいになっている。

私は月日が経つうちに洋子ちゃんがいなくなったことを受け入れていた。

「空音、お弁当一緒に屋上で食べよ」

「いいね。行こう」

私はカバンの中から弁当箱を出して、彩葉の隣を歩いた。

高校に入ってから莉奈と紗羅とはあまり話さなくなった。

洋子ちゃんがいなくなった頃から私は彼女が言っていた通りに執着するのを辞めて一人になってみた。劇的に何かが変わったわけではなかったけれど少しずつ周りが変わっていくのが分かった。そして私を受け入れてくれる友達が徐々にできてきた。私一人が変わるだけでいいんだと思えたのは洋子ちゃんのおかげだ。

「あの時に同じような境遇の洋子ちゃんと出会えたのは運命だなんて思うんだ」

「そっか。その洋子ちゃんって人に私も会ってみたかったなあ」

彩葉が売店で一番人気の焼きそばパンを手にながら言った。その時私はこの子と友達になって良かったと改めて思った。

「そういえば空音のお父さん、来週こっちに帰ってくるんだよね」

「そうなの。すっごく嬉しい」

私はいちごミルクのジュースを口に運んだ。屋上からは東高の綺麗な校舎と雲一つない空が見える。

私は今、洋子ちゃんのような素敵な高校生になれているだろうか。そう思いを馳せながら空を見上げた。すると、あの時に聞くことができなかった洋子ちゃんのピアノの音が微かに聞こえた気がした。

## HUMAN LIGHTS CARD

鹿児島第一高等学校 一年

五嶋 響

「五年前、世界人権国際会議で採択された人権保証書について、今年六月より……」

俺はテレビを消した。プツン。真っ黒の画面には俺が静かに暗く映っているのみ。もうすぐ十時だ、明日も早い。学校が忙しいのだから、テレビなど見ている時間はない。

よいせと立ちあがってベッドへ向かった。廊下をすてすてと足早に歩き、少し乱暴にドアを開け、ボタンと閉めた。少し冷える冬のベッドに入った途端、ゆるやかな浅い眠りに包まれ、少しぼーっとした。

——ふと布団の中でさっきのニュースの続きが気になった。世界人権国際会議……そんなものも聞いたことがあるな、とベッドの中で思い起こした。たしか社会で習ったような？ 五年前、どこぞの国が人権をカードにしようとして、大バッシングを食らった、ということらしい。

その言い分がいかなるものだったか……子供だった俺が聞いても、馬鹿馬鹿しいと思える理由だった。人権をカードにして可視化すれば、どこでも適用できて、人権侵害なるものは一切なくなるだろう、と。

けれどもなぜか採択された。世界中のメディアはこれに反対して、会議は議長やら書記やらみなが辞めてしまい、毎年あるものが一年間開催されなかった。

果たして六月に何が起ころんだろうか？ そういうことを少し考えようと思ったが、耐えがたいほど眠い。そんなことを考えている時間はない、と、もう眠ることにした。

暑い陽が入り込んでくる八月の朝。俺はポストの戸を開けて何かあるかを確認した。毎朝ポストを確認するのは俺の日課だ。そのときはただ新聞が一部入っているだけだった。夕べ雨だったからだろうか、少し濡れたビニールに包まれている。

ビニールから中身だけを抜き取り、ざっとニュースの確認をした。一面を大きく総理大臣の写真が飾っている。何か事件でもあったのだろうか、と新聞を見ると上にでかかど書かれていたのは、『人権保証書 昨日発行開始』というものだった。写真の下には小さく注記がされていて、

『日本で一番目に届いた総理は「一人前の人になれた」と笑みを浮かべた』と書いてあった。六月に作られたそれは厳密な審査を経て、今日から東京などの主要都市で一番早く配られるらしい。

その時はそんなものよりも昨日の野球の結果が気になっていた。昨日は十時過ぎまでテレビを見ていたが、母に、もう寝なさい、と言われしぶしぶ寝ることにしたのだった。しか

し結果は……好きなチームが負けを喫してしまったらしい。惜しいところまで行けてたのだが。

二学期が始まって少し経った頃のこと。日本史の授業で先生がソレの話をした。

「君たち、人権保証書、というものは知ってるかな？ 知っていたら手を挙げてごらん」

先生が聞くとクラスのおよそ三分の二が手を挙げた。その後、これは時事問題として、今学期の現社のテストに出るだろう、とした上でこう続けた。

「私としては、人権は生まれ持って存在するべきものであり、それを証明書として発行するのは大変よろしくないことだと思うんだ。しかし、時代の流れということで仕方のないことなんだろうか？ 私にはわからないが……」

そう言っただけで黙りこくってしまった。なるほど確かに、と考えた。人権をカードにして個人情報識別にあてる、というのはどうも先人への冒涇のようにも感じる。それが時代の流れなら仕方のないような気もするが、抵抗はある。というより抵抗がないほうがおかしいようにも感じる。

「さあ、この話はおしまいだ。本題に入ろう」

先生が立ち上がって、チョークを持った。

昨日、ついに家にそれが届いた。それは、見た目は重厚なクレジットカードのようなものだった。

まず、白地のカードに十八桁の数字の刻印がしてある。刻印は浮き上がり、触ってわかるぐらいの凹凸ができています。その番号の下に、

#### HUMAN LIGHTS CARD

と黒インク、横書きで書かれている。さらにその下には俺の名前がローマ字で書かれている。これは見てもわかるぐらいの凹凸はない。ただ、触ってようやく「若干でこぼこしてゐるな」ぐらいには感じられる。これを駅の改札のICカードの要領で、今度から試験的に、主要都市の役所、駅に、その後、全国で設置される機械に通すと、一瞬で個人の判別ができ、それどころか前科や持病、住所の特定もできるらしいが……。

「この数字は自分の管理番号だから、絶対に誰にも言っただけいけないよ」

母が言った。それからこう続けた。

「明日から学校に行くときは事務室にこれを見せに行きなさいね。それで届いたっていう証明にも、自分が自分であるという証明にも使えるから」

うちの学校の事務室は、玄関のすぐ近くにある。靴箱で上履きをとって、履いて、十歩も行けば、すぐ事務室だ。

朝、学校に着き、言われたとおり事務室に行き、カード

を見せることにした。すると、受付をしていた女の事務員さんからさっそく聞かれた。

「おはよう。カード？」

家でプラスチックの小さいケースに入れておいたカードをポケットから取り出して、事務員さんに見せた。すると、「はい、確認しました。明日から学校にきた時はここにきて見せてね。いないときは担任の先生に」

そう言われて、特にほかに何かあるわけではなかった。そのまま教室に向かった。

教室に向かうと、クラスの女子がいつものように廊下でふざけあっていた。どうも、昨日のテレビに人気のアイドルが出ていたらしく、それで「あそこかっこよかったよね」「わかるー！」というだけの会話が続けられていた。

ある日の帰り道。どうも俺の通学路は陰気臭い。学校近くは華やかで、駅なども近くにあるのだが、そこらを過ぎると何もない。ただの田舎道だ。

今日も駅前を通って、歩いて帰っていた。駅前に、人だかりが見える。気になるので、少し寄ってみたところ、そこではデモ隊が大声を上げていた。男女二十人ぐらいだろうか。おじいさんらしい人もいれば、若い女の人もある。プラカードには「人権保証書廃止」の文字が躍り、人は人で「無駄だとか「撤廃」だとかを訴えている。

「おい、坊主！」

後ろから声が聞こえてきた。はっとして振り返ると、後ろには、いかつい顔の男がいた。

「ちよつとこのビラ、受け取ってくれ。俺はこのデモ隊の代表なんだ。このふざけた制度を止めなきゃいけないと感じて、ここでデモしているんだ。な、受け取ってくれ」

言われるがままにビラを受け取った。

帰りの田舎道を通りながら、ビラを読んだ。手書きをコピーしたものだった。字も特徴があって読みづらく、全部読み切るということは難しかった。

『……人権保証書……有力者が……悪魔のカード……撤回……今すぐ制度の撤廃を求める……』

俺の通っている学校の物理の先生は、学校内では変人で有名だ。いつも面白おかしく授業をしてくれるのだが、今日はいつもとは打って変わり、落ち着き払って、教室に入ってきた。

日直が声を上げる。

「起立！」

全員が音を立てて立ち上がった。

「姿勢！ 礼！」

「お願いします！」

先生は頭を下げるだけで、何にも言わなかった。教室内が、静かながらも動揺していた。

「皆さん、少し個人的なことなのですが、発表したいことが

あります」

皆は「結婚とか?」「辞めるとか?」とざわめいていた。

「実は、ついに、私にも……」

そしてポケットから何かを取り出し、それをみんなの前にかざした。

「家にカードが届きました!」

クラスは少しざわざわした。「あなたのところ、届いてる?」

「いいや、届いてないよ」「あいつ届いたってよ」と。

「見たことないやつもいるだろうから、今だけは、席を立て、見ていいぞ。ただし、触らないようにな」

と先生は笑って言った。クラスの女子たちが立って前へ歩いて行った。

「先生、これって家に突然送られてくるんですか?」

ある女子が言った。

「そうだ、何の予告もない」

「私のと交換していいですか?」

「だめだよ、だめだよ! 入れ替わっちゃうから!」

「えー? 私は入れ替わっても、いいんだけど……」

「じゃあ物理教えられる?」

「無理に決まってるじゃん、先生!」

国際人権規約のB規約というものを先日学んだ。B規約というものは残虐刑や死刑の禁止を記したもので、日本は死刑制度があるゆえにこれを認めていない。しかし、その例の日

本史の先生の授業では、B規約が禁止する死刑について、先生から衝撃的なことを聞いた。

「ここからは余計な話だが、現代社会の補習だと思って聞いてくれ。国際人権規約のB規約というものがあるな。これは死刑やらの廃止を求めるもので、死刑を認める日本は、入っていないんだな。先日アメリカのある州では死刑制度を無くす代わりに、例のあの……あれだ、忌々しいカードを没収すると決めたそうなんだ」

その先生は、黒板の前に座りながらこう続けた。

「例のカードの原則は、『持たなければ人ですらない』というものだ。持っていないということは、まあ、そこら辺のアリソンとか、野良犬とかと同格になるわけだ……それで、ここから先は恐ろしい話なんだ。怖かったら耳をふさいでもいい」  
それで十秒ほど黙った後、いつもの声からは考えられないほど低い声で、こう話した。

「……どうやら、その……いわゆる『もはや人ではない奴ら』を集めて、客が買いつたり、それどころか拷問なり殺害なり、好きにしている、というテーマパークがそこにできるらしいな……あくまでまだ計画の段階だが……」

教室の空気が一瞬冷えた。怖くなって、左右を向いた。目が合うと、互いに見つめ合っていた。

「もしかしたら日本でも、死刑の代わりにそれが導入される可能性がある。奴らはペットショップの犬猫と変わらなくなるんだから、それを考えると恐ろしい……」

その日の帰り道の話だ。十一月ということもあって、葉は落ち、田んぼの稲は刈られている。俺は普段二キロもない道を歩いて帰るのが常だ。バッグは重く、肩にのしかかっていた。

道の途中には暗いところがある。木が手を伸ばして空を覆っているのだ。そこに差し掛かった時、こう声をかけられた。

「よう坊主、ちよつといいか？」

それはこちらを安心させるためでもなく、脅すためでもなく、しかし不安になる声だった。後ろを向くと、大学生ぐらいの男と、三十ぐらいのおじさんが立っていた。

「坊主、カードは今持っているか？」

おじさんのほうが、静かに低く、声をかけた。

「カードだよ！　ないのか？」

大学生のほうも口を開いた。

逃げたかった。でも足が動かない。もう怖くて怖くて仕方なかった。俺は恐る恐るカードを左のポケットから出した。

震える手で、じっと握った。

「なんだよ、持ってるのか……」

「兄貴、こいつも無理そうだな」

大学生ぐらいの男がこう言った。

「ああ、じゃあな坊主、夜道には気を付けるんだぞ。持っていなかったらお前を殺して、金を奪おうと思ってたんだから」

二人は去って行った。

俺は、びくびくしながら、カードをしまうこともせず、ぶるぶる震えて帰って行った。

人権とは何か、それが目に見えることによって何のメリットがあるのか？　連日それがテレビの番組内や国会で議論されていた。

その上先日あの事件。あれはきっと保証書というものがあり方を考えてゆくものになるだろう。考えただけでも身の毛がよだつ。

ある男がいろいろなところからカードをこっそり盗み、コレクションしていたというニュースが流れた。盗まれた人はどうしようもない。どこにも行けないし、お金があっても何も買えないし、家に返ろうにも「カードがない」と拒否される。再発行も、元のカードがなければどうにもならない。被害者は途方に暮れるしかなかった。

そして男は盗んだカードを好き勝手に扱った。裏で売り飛ばしたり、自分のものとして他人に成りすまして好き勝手したり……男は今行方知らずだ。恐らく他人に成りすまして、好き勝手生活しているのだろう。

カードのある生活にもすっかり慣れ切った。朝は事務室にカードを見せに行き、店に入るときや乗り物に乗るときなどもカードを機械にかざす。もう面倒とも感じなくなっていた。カードがないと自分と認めてもらえなかったから、常に肌身

離さず携帯していた。

そんな頃、あるニュースが飛び込んできた。政府が死刑を廃止する、というものであった。

死刑を残酷刑とし廃止する代わりに、ある刑罰が導入される。それは何か？ 「カードの没収」だ。カードを没収し、基本的な人権を一切持たせない。そんな状態にするのだ。

するとどうなる？ 店にも入れないし、乗り物にも乗れない。家を持つなんてもつてのほか。それどころか、そもそも警察にすら、誰にも守られない……カードがすべてを握っているから、カードがなければ何もできないのだ。

カードの没収は残酷刑には当たらない、というのが政府の解釈であった。命も奪わない。傷ひとつつけない。それ故、非人道的ではないとされた。やはり皆反対するのは最初だけで、始まってしまえば何も言わないのだ。

しかし人権保証書というシステム自体には賛否があった。メリットとしては「保護されているという安心感」「見えることにより不当に扱われる事のない」というのが挙げられるが、デメリットの方が俺にとっては大きく感じてしまった。

しかし俺にとってはもうどうしようもできないこと、として片付けるほかなかった。

「行つてきまーす」

一月の晴れた朝。俺は玄関を飛び出した。前の件から、あそここの暗い道を歩くのがわずかに恐ろしくなっていた。

いつの間にかみんな「おはよう！ 誰？」という挨拶をして、カードを見せてもらうことで本人だと認めるようになった。カードの権限は、もう止められなくなっている。

——学校の事務室前には、今日も人だかりができていた。その列に並んで、ようやく俺の番がやってきた。俺はカードを上着の内側のポケットから出そうとした。しかし中には何もない。

あれ、ない。別のポケットかな？ と思い腰のポケットに手を入れる。ない。あれ、今度はズボンのポケットに手を入れた。やはり、何もなかった。焦った。冷や汗が出てくる。身体が次第に震える。意味もなく左右を見回した。

「あの……カード……」

事務員の女性が、心配そうに声をかけた。震える。頭がくらくらする。あるべきものが、ない……俺は……ああ……俺は……

ボタン。

俺は、その場に倒れこんだ。

## 夢屋

鹿児島修学館高等学校 一年

マッサン

高校3年生の夏、俺は受験勉強に明け暮れていた。いや俺だけではなくクラスメイトほぼ全員が必死こいて勉強している訳だが、その中でも俺は学年でいつもトップ5に入る成績を努力で収めてきていた。学校生活だけでなく私生活そのものも大変だが取り敢えずは自分が合格したい大学にはこの調子だと落ちることは無いと自分でも思っているし、統合テストの結果も合格できると俺に言ってくれた。

しかし、俺には一つだけ弱点と言えるものがあつた。それは寝起きの調子が異様に悪いということだった。いや、寝起きが悪い人は多いだろうし、弱点というほどでは無いと思うが、俺の場合、普通の寝起きが悪いと言う基準では無いのだ。なぜなら起きてから学校にきて授業を3限目まで受けた時にようやく目が覚めてくる。ここまでならまだ少し寝起きが悪い程度で済まされるが、やはり1番異様だと思うのはどんなに早く寝ても朝起きることが難しいのだ。例えば前日午後6時に寝たとしても頭がぐらぐらしてボーとしてしまう。俺は昔婆ちゃん家に行った時に昼寝をしたら、いつの間にか自分の

家にいて、あれから2日経つたと告げられた時もあった。俺は一日中寝ていられる体質なのかもしれない。この体質のせいで俺は3限までの授業の内容が頭に入らないどころか記憶にもなく、家で3限分の復習をしなければならなくなり、勉強時間をすり減らすことになってしまうのだ。今のまま勉強を続けていても何の問題もないのだが、せめてこの時間の無駄を無くしてもっと有意義なことに時間を当ててみたかった。

俺はレンタルショップによく行く。DVDでしか映画が見れないからだ。何かこだわりがあるのか？と友達に聞かれたことがあつたが、どうしてもスマホのような小さな画面で映画を見ることを体が生理的に受け付けないのだ。だから俺は映画は映画館かDVDでしか見れない。まあ当然受験前の時期じゃ映画どころではないが、夏休みの始まりの数日だけ、息抜きとして俺は勉強しない日を設けていた。親から無理はよくないと言われていたのでそれを守っている。だからその数日は元から好きだったり、新しい映画を見て過ごそうとしていた。俺は常連になっていくレンタルショップに行き、そして最新作がなれべられているコーナーで面白そうな映画を探して、面白そうなものを2、3枚借りていき家に帰る途中見覚えのない店が目にとまった。

「あれはなんだ？ 前まであんなのなかったような…」

店にはのれんがかかっていて随分と古臭そうな外装でお酒を売っていきそうな雰囲気があつた。のれんには「夢屋」と書いてあつたが、中がどうなっているのかはドアが曇っていて

よく見えなかった。

（ちょっと気になるな）

ふと、俺はそう思い面白くなさそうな店だった場合、店を間違ったふりをして帰ろうと策を立てて中に入ってみることにした。その店は狭い空間に本棚の中にDVDが大量に敷き詰められていてブルーレイも売っている店だった。

「すつご。こんな所があったのか」

そう呟きながら俺はそのDVDを色々見ていったが、あることに気がつく。

「なんだ？　どれもみたことも聞いたこともない物しかないじゃないか。」

「おや、お客さんかい？　珍しい」

奥から枯れた声が聞こえてきた。その声に釣られ振り返ってみると紫色のフードを深く被り、腰が60度くらい曲がっている占い師のような見た目の老婆がそこにいた。俺は不気味に思いながらも、

「俺もこんな所にレンタル屋さんがあるなんて知りませんでしたよ」

挨拶の代わりにそう言葉をかけたが、

「そりやそうさ。ここは必要な人以外は来れないようになってるからねえ…」

と訳のわからないことを言い出した。かなり不気味で早く帰りたかったが、

「ここってどんな映画を借りれますかね？　ここにあるもの

全部、俺みたこと無いもので映画かドラマかアニメなのか区別ができないんですよ」

気になってそう聞くと、

「いやいや、ここには映画もドラマもアニメ用のDVDはないよ」

ケタケタと笑いながらそう言った。

「じゃあこれって何なんです？　CDには見えませんが…」

老婆の言葉に不気味に思いながらもそう尋ねると、

「いやいや確かにDVDだよ。ただし夢のね」

ニヤリと気味の悪い笑みを浮かべてそう言った。

「夢って…。どういうことですか？」

わけがわからず老婆にそう尋ねると、

「まあとにかく借りていきなさい。本質はDVDと変わりはないわ。テレビでもDVD専用の装置でも対応してるよ」

そう言う俺の背中を押し、店の外まで追いやった。外に出ると老婆は最後に、

「期限は1週間だよ。それだけは守るようにね」

そう言うパタンと曇っている扉を閉めた。

「えー？　金も払ってないし、どんなDVDなのか説明も受けてないし、なんだあのババア、後から高額な金を請求するタイプか？」

店の外に出た後思ったことを気がつけば全て口に出していたが、老婆が飛び出してこなかったのも今の言葉は店に届いていなかったらしい。俺はしばらくその場で色々考え立ち往

生していたが、

「まあ物は試しっていうしな…。金を請求してきたら最悪警察に言えば何とななると思うし…」

多少不安が残っていたがもう一度入店していらないう言ってもあの変な老婆が取り合ってくれるとは到底思えなかった。(なら1週間後に反してまた来ますって言って平和的に解決するのが一番だよな)。そう考え、結局今日のところは引き返すことを決めた。

4日後の4時過ぎ、俺は常連になっているレンタルショップのDVDを全て見終えて、楽しみがなくなったことによる退屈していた。

「もう全部見終わったのか。もうちょっと多く借りてもよかったかもな」

そうぼやきながらテレビの前に積み重なったもう見終わったDVDのケースを返すのを忘れないように専用のバッグに入れておこうとすると、4日前に入れっぱなしでバッグからまだ出てきていない2、3枚のDVDが入っていた。

(：まあ、勿体無いし最初だけ見て内容だけ確認してもいいかもな)そう考えるとバッグの中から1枚DVDケースを抜き取り、DVDプレイヤーがDVDを飲み込む所を確認して、テレビのリモコンをもち、早速再生ボタンを押してみることにした。すると、そこに映ったのは情景は雲のような地面にピンク色の空にキャンディーやチョコレートの木があちこちに生えているという物だった。

「何だこれ？　こんなの小学生の低学年か幼稚園児くらいしか見ないやつだろ」

少し期待していた為に、若干の怒りが湧き再生ボタンを止めようとしてみたが、

「あれ？　は？　え？　ここ、どこだ？」

映像はいつの間にか映像ではなく現実にしり変わっていて、俺が今いるところは間違いなく今テレビで再生していた情景が撮られている場所だった。

「いやいやいや…。え？　これは夢か？」

試しに自分の頬をつねってみる。：痛くない。

「ふう、やっぱり夢か。でも俺いつの間に寝ちまったんだ？」

そんな独り言を発している時、あの不気味な笑みと共に老婆が言っていたことを思い出した。

『確かにDVDだよ。ただし夢のね』

「夢のDVD：」

記憶の老婆に釣られボソツと言葉を発した。

「ま、まあ偶然だろ。それか、あのババアやけに気味悪くて、悪い意味だが印象には残っていたし、知らぬ間にあいつの言うことを気にしていたからこんな夢を見てるんだ」

俺は自分にそう言い聞かせる他なかった。こんな非科学的なことが自分に起こってはたまった物ではない。しかしそんなことを考えていると、チョコレートやキャンディーの木が少し気になり始め、

「少し食べてみるか。夢なんだし減るモンじゃないだろ」

そして、チョコの木から枝を折って、さらに小さく折り、それを口に入れてみると香ばしいアーモンドの匂いとともに甘いミルクチョコレートの味がした。

「うま……。うん？　ちよっと待てよ」

俺は一瞬その甘さに気づかなかったが、痛みは感じなかったはずなのに味覚を感じることができていたのだ。そういえば、確かに枝を触った時の触覚や時折吹いてきていた風が頬を撫でる感触も感じるようになっていた。

「でもなんで、ここは夢だろ。なんでこんな感覚があるんだ？」

痛覚はないがその他の感覚はある。そう考えると、ますます不気味に思えて妄想が加速し、もしかしたらこの見知らぬ土地に閉じ込められたのではと思考が巡ってきた。

「まずい、まずい。早くここから出ないと」

俺は焦って走り出した。出口がどこにあるかもさっぱり検討がつかなかったが、とにかくこの空間から出たかった。あまりの非現実的な空間を脳が受け付けていないのだ。しかし、焦りや走ったせいで心臓がバクバクと限界まで高まった瞬間、そこから目が覚めた。いつの間にか時計は18時を回っていて、俺は青でいっぱい画面のテレビの前で椅子に座っていた。体は冷や汗で背中まで濡れていたが、どうやら帰ってきたようだった。しかし、まだ確証が欲しくて自分の頬をつねってみることにした。

「……痛い」

そう呟き、今度こそ現実に戻ってきたのだと確信した。そ

の時自分自身に起きた異変に気づくことになった。俺は全く眠くない。というより、たった2時間だけしか寝てなくて、俺が起きられることがすでおかしい。俺は昼寝でも最低6時間は寝てしまうはずからだ。俺は恐る恐るプレーヤーからDVDを取り出した。

「なんだったんだこれ」

短い間で色々なことが起きすぎて頭が混乱して一言発する。しかしその中でも分かった事は、あの場所は感覚があったはどうであれ夢だった事と、今確かに起きたばかりのはずなのに全く眠気を感じないということ。そして、その異常性はこのDVDに原因があるという事。

「気持ち悪いな。今すぐ返しに行くか」

俺はDVDをケースに入れ専用のバッグに詰め込むと家を飛び出し、そのままあの店に向かった。あの店の場所に行くとは明かりがついていて、まだ老婆はいるようだった。

（全部見終わったので返しにきましたとでも言っておこう）そう考え俺は店に入った。入るとDVDの詰まった本棚を眺めていたあの不気味な老婆がいたので、

「あの、これ見終わったので返しにきました。大体レンタル料は3枚借りたので千円くらいですかね？　もっと高いですかね？　じゃあ三千円置いて置くので、それではまた」

俺は緊張のせいで今までにない早口で言葉を発していき、すぐにここから出ていこうとした。しかし、

「おや、どうしてだい？　とても目覚めが良かったはずだ

ろ？　そしてそれがこれのおかげとも分かっているはずなのにどうして使わないんだい？」

老婆は俺に起こった出来事をさも見ていたかのように的確に当てた上でそう質問してきた。ゾツとする俺は老婆の言葉を無視して扉を出ようとしたが、

「これを寝る前に見れば、いくら寝起きが悪いお前さんでも朝スッキリして目を覚ますことが出来るのに」

老婆が提案するように俺にそう呼びかけてきた。俺はピタリと足を一瞬止め、ゆっくり扉の目の前まで歩いて行き、（やばいと思ったら逃げよう）老婆の話を聞くためにドアの取っ手に指をかけつつ老婆の方へ体を向けた。

「まあ、そのDVDをつけた瞬間、変な夢に入り込みましたけど」

俺は敢えて深くは言わず、それだけ伝えると、

「だから言っただろう？　これは夢のDVDなんじゃ。色々な種類の夢を見るためのDVDなんじゃ」

老婆は「全く」という風にそう言った。

「：夢と寝起きって関係なくないっすか？　それになんて俺が寝起きの悪いこと知ってるんすか」

ドアの取っ手を持つ指を増やしそう聞くと、

「一つは言っただぞ。ここに来れるのはこれが必要な奴だけじやと、寝起きが悪かったり悪夢で苦しんでいたりする人だけ」

老婆はクククと笑いながら言った。

「もう一つは？」

「それは言っけなかったな。実は寝起きの悪さというのは夢に入り込み辛い奴らがそうなるのじゃ。お前さん、普段夢を見ないだろう？　夢が見れないということは眠ってはいるものの眠りが浅いという事、すると結果的に寝起きも悪くなるのじゃ」

ニュースでインタビューされた専門家が話すように淡々と老婆は答えてみせた。やはり依然変わりなく不気味であったがその言葉には信憑性というものが感じられた。確かに俺はほとんど夢を見ない。見た気がする時もその夢の内容が思い出せないことがほとんどだ。俺は少しだけ警戒を解かし次の質問に移った。

「：どうやって見せているんだ？」

「それは、ククク、教えられんのう。じゃがルールを守れば何も悪いものではないことは保証しよう」

「ルール？」

「何、たった2つだけじゃ。1つ目は前にも言ったが必ず1週間以内に返却すること。2つ目は同じDVDを見る期間は1日、つまり2日目以降は同じものを見てはいけないという事、それだけじゃ」

すると老婆は渡したDVDを持って俺のところ近づいてきて、

「せめて後3日間だけ使ってみる気はないかい？」

3枚のDVDを差し出した。

「：いくらなんだ？」

「タダだよ。正真正銘0円」

俺はしばらく考えたのち、差し出されたDVDを受け取って、

「3日だけなら使ってやる」

俺は寝起きのいい朝というののもどうしても感じてみたかった。老婆はニヤリと笑い、

「そうかい。それじゃあ使うといいよ、その夢を」

俺はそのままDVDを持って帰ってきた。しかし家に帰ったのはいいもののやはり少し抵抗があった。あの夢からはどうやって出られるかまだ分かってなかったからだ。

（持つてくるんだったら使い方とかちゃんと聞いておいたほうが良かったな）そう少し後悔の念も混じった。しかし、そんな後悔や抵抗を差し引いてもこのDVDの効力を早く試してみたい自分がいた。本来なら俺は慎重派の性格をしていると自分でも思っているが、はちみつが甘い香りを漂わせるようにこのDVDが誘っているようにキラキラ光るように見えた。俺はその誘惑を振り払えるほどの理性はなかった。結局俺はいつの間にかそのDVDをプレイヤーに入れて再生ボタンを押していた。先ほどとは違うDVDだったので移っている情景も当然違っていて今度は小麦畑のようなところに来た。さつきと違って派手な景色ではなかったが、暖かな日差しと涼しい風がなびいていて懐かしい香りのようなものも感じ取れた。田舎が故郷でもないがなんだかそこにいるだけで安心するような場所だった。少し歩いたところにちよつとし

た丘がありそこに登ってみると、あたり一面の小麦畑を見渡すことができた。

「夢って色々な種類があるんだなあ」

不思議な空間にいるはずなのに心は落ち着いていて朗らかな気持ちになっていた。この情景もそうなのだろうが、やはり、この夢の雰囲気飲まれている風を感じとれもした。俺はそこで1時間くらいくついでいると、少しこの情景に面白みがないような気がしてきたので、1回起きようとしてみることにした。

（戻れ、戻れ）心の中で何回か連呼してみた。しかし、何も起きなかった。

「まいったな、やっぱり起きかたが分からねえ」

そう呟くとハッと目が覚めた。寝たのは夜の10時だったはずだが目が覚めたのはなんと7時、目覚ましなしで今までで1番早く起きることができたのだ。さらに感じるはずの異様な眠気もしない、まさに完璧な俺が望んでいた朝だった。

「すげえ、こりゃ本物だ」

俺はこのDVDの効力を改めて感じていた。確かに胡散臭すぎるが本物の夢のDVD。俺は舌なめずりをした。この日の朝は今まで俺が感じた朝とはまるで別物のように気持ちが良いかった。朝起きた時の気持ちよさが余韻として残っていて、何をするにも気分が良かった。そのおかげか少しだけ勉強を試してみたが、夜やる時よりも理解が早くスウーと頭に入っていく感覚があった。

「ふふふ、ふふ、あははははは！」

俺はこの素晴らしい効力に笑いが込み上げ、そして吹き出した。

（これさえあれば俺はもう無敵。大学なんて余裕で受かる。いや今目指している大学よりもっと上のレベルにまで手が届くかもしれない！）俺はその時完全に受験の勝利を確信していた。これさえあれば怖いものはなくなるとそう思った。夢には予想した通り様々な種類の夢があった。落ち着く田舎の風景の夢やファンタジーな一瞬で現実ではないと分かる夢だったり、似たような夢もあつたりしたが、決して全く同じ夢を見ることはなかった。確かにまた入ってみたい夢もあつたが、あの老婆が言っていたことを守らない事はなかった。しかし、異変に気がついたのは夏休みが終わった後の中間テストの前日だった。俺はその頃にはもうあのDVDを御用達にしていた。しかしそのせいで周りからは夏休みからずっとDVDにはまってしまっているように見えていた。

実際そうなのだが、親はそのせいで成績のことにに関して心配をしていた。このDVDのことについて信じてもらえないだろうから話していいないせいでもあつたが、テストの前日にはDVDをやめろと言われた。俺は仕方がなくその日はDVDなしで寝てみた。するとどうだろう。翌日に起きると頭が脳の代わりに重りを入れたかのように重くなり、いつもは4限から覚めるはずの意識が、学校にいる間中全く覚めなかった。以前よりも確実に寝起きが悪くなっていることが伺えた。

なぜ？ その問いに対して心当たりがあるものは一つしかなかった。俺は学校が終わると朦朧としたあの店へ行った。俺の身に何が起きたのか問い詰めるためだ。俺は店に着くと老婆に向かつて、

「おい！ どうなっている！」

そう叫んだ。その時の老婆の表情は何か勝ちを確信した時に見せる表情と似ていた。

「おや、どうしたんだい？ そんなにふらついて！」

老婆はその表情を崩さないまま煽るようなセリフを吐いてきた。

「どういうことだ……。お前、こうなるって知ってただろ！」

俺はズカズカと老婆に詰め寄り胸ぐらを掴んだ。

「わしに言われたことをそのまま信じたのかい？ 随分純粋なお兄さんなんだねえ」

老婆はそれでも表情を一切変えることなく話していった。

「質問に答えろ！」

俺は胸ぐらを掴む手をさらに強く握って脅すように言った。

「ならば教えてやろうじゃないか……」

しかし、老婆は俺の手をいとも簡単に振り解いた。俺はそんなに力が強い訳でもない。今頭の中がふわふわしている様な感覚に陥っていたせいだ。

「まず、わしは夢を見れば眠りが深くなるといったな。あれは嘘じゃ。逆に夢を見ててしまうほど眠りは浅く、寝起きは悪くなるのじゃ」

そう老婆は告げた。

「じゃあ、なんで俺は眠気が完璧に治ってたんだ？」

「今それを言おうと思ってたところじゃよ。実はあのDVDには見ると眠るだけではなく、頭を後々覚醒させるようになっていてな、お主はそのおかげで目覚めることが出来ていた訳だが、実際は以前よりも眠りが浅くなっていて、DVDを見ないと目を覚ますことすら難しくなってしまう。同じものを見るなど言ったのも、1週間以内に返せと言ったのも、お前に耐性をつけさせないように工夫するためじゃ」

老婆は饒舌に俺の状況を説明した。

「一体、一体なんのためにそんなことを？」

「さあな。じゃがなんでそんなに怒ってるのじゃ？ そんなに眠ければDVDを使えば良いじゃろうに」

「もうこんな胡散臭いの使えるか！ もう二度とこねえよ！ というか、警察を呼んでやる！」

俺は老婆に向かって怒鳴り、その場で電話をかけようとした。しかしツーとなるだけで電話は繋がらなかった。

「クソ、なんで！」

「まあ、出来ないじゃろうな」

老婆は知った風にクククと笑いながら言葉を発すると

「さっき同じDVDを使うと効力が減ってしまうと言ったな？  
じゃが実はいくら見ても効力が減らないものもあるのじゃ。  
それがこいつ」

老婆はそう言いながら、ケースが紫色の明らかに今まで借

りていたのとは雰囲気が違うものを俺に見せつけた。

「バーカ、いるかそんなの！ ここを出てからもう一度警察に連絡してやる。お前は終わりだ！」

俺は残っている力を全部出すつもりで近所全域に広がるくらの声で叫んだ。俺はそこから走って逃げ去るように家に帰った。

家に帰った後、そのまま警察に電話したがいたずら電話としてまるで相手にされなかった。冷静になって考えてみれば、俺は今高校生で、尚且つ、こんな不可思議な話、信じられる前にいたずらだと思われても仕方ないだろうが、俺はこの時ひどく警察が憎くなった。その後、俺はDVDの効果が得られなくなり、中間試験は眠気のせいで全敗。親からは呆れられ、最近では「大学に行かないなら出ていけよ」と言うのが口癖になった。俺はそのことにずっと頭を抱えていて、気がつけば期末試験がもうすぐそこまできていた。

「どうすればいいんだ。もういっそ体のどこかを切り落として眠気を覚まそうか？」

そんな出来もしないことを口に出して提案してみるが、当然なんの意味もない。そして、唐突に苛立っていき、近くにあったDVDのバッグを壁に投げつけた。すると、ゴツと音が響き渡った。本来なら空なのだからそんな大きな音が鳴るはずはない。俺はバッグに近づき、それをひっくり返してみると紫色のケース入ったDVDがこぼれ落ちた。

「ヒ！」

俺は思わず悲鳴をあげてその場で腰を抜かしてしまった。

「なんでこんなものが……」

グロテスクな虫を見るように、背中がゾワゾワと鳥肌が立っていることがわかった。

（早くこんなもの捨てねえと）そう思い恐る恐るDVDに手を伸ばそうとしたその時

「何やってるんだ？」

親父の声が聞こえた。2つの恐怖が挟みこんでくるようだった。何も言えず、振り返ることも出来ない俺に

「欲に負けて、成績は落ち、目標を達成することが出来なくなるなんて……。クズの極みだな」

俺は親父の顔を見ることが出来なかったが、どんな目で俺を見ているのかはわかった。

「大学に行けなかったら家から出て行けよ」

そう言い、足音とともに親父はどこかへ行ってしまった。

俺は悔しかった。確かに俺は欲に忠実だったが、そのせいで成績が落ちた訳ではない。逆に欲を断ち切ろうとしたからこんなにも成績が落ちてしまったのだ。そのことも知らないであのクソ親父が！俺は親父を見返すなら悪魔にも魂を売ると思った。そしてDVDを取り、

「やってやるよ。これを使ってあいつを黙らせてやる！」

俺はバレないように深夜にリビングに行き、プレイヤーにDVDをセットし再生ボタンをつけた。

（もうこの際、どんな夢でも眠気さえ覚めてしまえばいい）

俺がそう考えていると、プツツとテレビの電源が切れたように真っ暗な景色がそこに映った。

「な、なんだ？ 故障？」

俺はそう思い、テレビに近づこうとしたが、いつものようにその情景はすぐに現実へと置き換わった。

（故障じゃない？ いやあ一体なんの夢なんだ？）

俺は一回様子を確認しようと歩こうとしてみた。すると、足が何かに引っ掛かり転んでしまった。

「痛え、なんだ」

俺はここで2つのことに気づいた。1つ目はこの夢は他の夢と違い痛みがあること。もう1つは俺の足が引っ掛かったのは誰かが俺の足を掴んでいたからと言うことだった。誰のものは暗くて分からない、まるで地面から手が生えてきたようだった。

「ウアアア！ 離せクソが！」

俺はもう片方の足で手を蹴り飛ばそうとしたが、それを止めるように地面から手が生えてきて足を掴まれてしまった。俺はパニックになって足に力を入れ、手を剥がそうとしたが、次の瞬間俺は、足からその地面に向かって蟻地獄のように沈んでいっていることがわかった。

「な、なんなんだよ！」

俺は必死にそこからもがいたが機械にでも引っ張られていくかと思うくらいで、人の力でどうこう出来るものではないと感じた。すると、暗闇の中からあの老婆が現れてきた。暗

闇でも認知できるほど近くなった老婆に

「おい、なんとかしてくれ：助けてくれ！」

俺は最後の力で老婆の足にしがみつこうとしたが、後、数センチのところで届かず、その僅かな差もどんどん遠ざかっていく絶望感が身体中を駆け巡っていた。

「だ、誰か！ 父さん！ 母さん！ 助けてくれー！」

少年は暗闇の中でその叫び声とともに消えていった。その瞬間、暗闇は消えていき、情景は少年のいたリビングに戻っていた。老婆はプレーヤーからDVDを取りだし、

「寝るときに見る夢と目標の夢って実は一緒にできるのじゃない」

独り言を言って少年の家から消えていった。

数日後、

「おい、婆さん。なんだこのDVDは」

「言ったじやろう？ 夢のDVDと。悪夢にうなされずに済んだじやろ」

「いや、そうなんだが、どういう原理で？」

「それは教えられんのう。じゃがこの前言ったルールを守れば何も悪いものではないことは保証しようぞ」

「：じゃあもう少しだけ使ってみるよ。でも何か異変が起きたらもう二度と借りないからな！」

「それで良い。ちなみにお主は先ほどどんな夢を見たんじゃ？」

「：超難関大学に合格して、家族全員がそのことを泣いて喜

んでいるような夢だったな」

老婆はケラケラと笑った後、言葉を発した。

「そうか、それは良い夢じゃったな」

## 次のステップをめざして

立石 富男

文章上達の三原則を自分なりに考え、あちこちの文章講座で話をしている。私の三原則は、読む、書く、批評を受ける、である。おそらく作家の多くが同じような考えだと思う。本を読まなければ語彙が増えないし、書かなければ表現力が身につかない。また批評されなければ自分の長所短所がわからない。講座生にはこのことを再認識してもらいたい。

この文芸ゼミナールでは毎年刺激を受けている。高校生の瑞々しい感性に触れて衰えつつある脳が活性化する。自分の高校時代を振り返り、書く力の違いに驚きもする。しかし、読書については不満がある。私たちの世代が文章を書き始めた頃に読んでいた作家、作品を今の高校生はほとんど読んでいない。今後書いていく気持ちがあるのなら古今東西の名作をぜひ読んでほしい。厳しい言い方になるが、読書量を増やさないと限り高校生文芸で終わってしまう。それではこの一年が惜しい。将来に向けて次のステップをめざしてほしい。

全体的な感想として、みんなよくがんばったと思う。学業との両立、コロナの収束が進まない中、作品を仕上げるという最初の約束を見事に果たした。その努力は高く評価したい。書き上げた自作品を今はどう感じているのか、ほかの人の作品も読みながらじっくり振り返ることも大事である。新たな課題を見つけ、チャレンジしていくことを期待したい。

## 孤独を友に

出水沢藍子

7月にスタートする文芸ゼミナールの教室は、白いシャツの制服が並んでいかにも涼しげです。8回の講座を終え、翌年の1月には、きりりとした黒や紺の上着に身を包んだ受講生が、おごそかな表情で閉講式を迎えます。

今年も多彩なジャンルの小説が誕生しました。

高校生と話すことなど滅多にありませんが、皆さんと時間を共有して、作品から「現代高校生」の関心事や夢や未来図を想像し、教えられることも多く、なんと豊かな時間を味わっているのだろうと感謝しきりです。

今回からオンラインによるゼミが可能になり、離島の高校生も初参加しました。より多くの生徒さんに創作の機会を与えようという主催者の試みが実を結んだことになります。

小説を書くことは心細く不安な作業の連続です。まるで連れも地図もない一人旅をしているようなもの。

「孤独に立ち向かい、孤独をねじ伏せ、孤独を超越する道を歩かなくてはならない。その道を歩く者だけが、より高い未踏峰に登ることができ、新しい鉱脈を掘ることができると、作家の丸山健二さんが書いています。（「まだ見ぬ書き手へ」）孤独を克服して書き上げた苦心の作を、仲間たちに披露して意見を交換し合う。そこに文芸ゼミナールの大きな意義があると思うのです。



# 講座の様子



## 開講式



## 座談会（特別講師：佐々木譲氏）



## 講座



## 講座開催日時

| 回   | 月・日    | 曜 | 時 間         | 回   | 月・日    | 曜 | 時 間         |
|-----|--------|---|-------------|-----|--------|---|-------------|
| 第1回 | 7月11日  | 日 | 12:30～16:30 | 第5回 | 10月31日 | 日 | 12:30～16:30 |
| 第2回 | 8月1日   | 日 | 12:30～16:30 | 第6回 | 11月21日 | 日 | 12:30～16:30 |
| 第3回 | 9月26日  | 日 | 紙面開催        | 第7回 | 12月19日 | 日 | 12:30～16:30 |
| 第4回 | 10月17日 | 日 | 10:00～16:00 | 第8回 | 1月23日  | 日 | 12:30～13:30 |

## 編集後記

海音寺潮五郎記念文芸ゼミナール受講生作品集「潮音く若人の樹」が完成しました。全八回にわたる日曜の午後、離島を含む県内各地から集まった九名の受講生が、文学について共に語りました。そして先生方は、一つ一つの言葉の重みや奥深さを大切にしながら、作品を執筆していくことの愉しみを、毎回熱心に御指導くださいました。

十代後半を生きる若者たちが、その感性で切り取った作品世界は、やはり瑞々しく、一方で潔く、今に生きる人間たちを映し出しています。受講生たちは自らが生み出した作中の人物たちと共に悩み、共に笑い、共に成長してきました。それぞれの作品の中に、唯一無二の親友を得た受講生たちは、これまでよりも逞しくなったに違いありません。

言葉を伝える手段は多様化し、時間や空間を簡単に飛び越えられるようになりました。そのような時代だからこそ、「何を伝えるか」について、自分自身と対峙する機会を得られたことが、受講生の矜持となることを願います。

令和三年度海音寺潮五郎記念  
文芸ゼミナール受講生作品集  
潮音く若人の樹

令和四年三月

編集・発行

鹿児島県立図書館